ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	大西 雅博

1．教育の責任

(1) 担当科目

指揮法、 人間教育学ゼミナールI(基礎)、人間教育学ゼミナールI(応用)、基礎ゼミナールII、 人間教育実践力開発演習II、人間教育実践力開発演習III、 音楽表現力演習II、卒業研究、 器楽合奏I(和楽器を含む)、 器楽合奏II、器楽合奏III、器楽演習IB(管打)、 器楽演習IIB(管打) 、器楽特殊演習IB(管打) 、器楽特殊演習IIB(管打)

(2) 学生支援

・マーチングバンド部顧問として、学生の募集活動及び入学後の指導を行うとともに、就職についてもサポートしている。

・音楽専修長として、専修内をまとめるとともに、より一層の発展を目指し、広報活動・就職活動に力を入れている。

・学部運営委員として、各専修との調整を図りながら、学生ファーストの精神の下、運営に取り組んでいる。

・人権教育研究推進委員として研修会へ参加し、学内の人権意識の向上に努める。

2．教育の理念・目的

子供たちにとって、先生は新人も熟練も関係なく、全てがプロの教師でなければならない。若い教師にしか出来ないことは多々考えられるが、若いから出来ないという甘えは、教育現場では許されないと考える。失敗が許され、修正が出来るのは、学生である今しかない。より実践的な体験を通して、プロとしての厳しさと自覚を持たせたい。他人の意見を真摯に受け止めるとともに、失敗を素直に認めることにより、自らの成長に役立たせたい。学生だから、これくらい出来れば良いという評価ではなく、社会人としていかに有るべきかを基準に、人間力の向上を目指したい。

3．教育の方法

授業においては、実際の現場でどのようなことが起こり得るかを想定しながら、実践的な学修を行っている。人前で話すことに慣れるため、模擬授業はもちろんのこと、様々な場面で意見を述べるよう設定している。また、他人の意見を受け入れる姿勢を養うため、他人から評価される場面も多く作っている。自分も他人のために意見を述べ、自分のために他人の意見を吸収するというサイクルを何回も繰り返すことにより、「話す」ことへの慣れや自信を身に付けさせている。そして「話す」から「伝える」「教える」ことへ発展させるためには、それに裏付けされた「技術」が必要であることに着目させ、自ら高い技術を身につけようとする姿勢を養っている。特に音楽は、実践的な技術が問われる場面が多いため、圧倒的な知識と技術が必要であることを、強く認識させている。まずは先生が生き生きと歌う、そして子供たちがその姿に影響され、歌うことの楽しさを知る。歌わせる技術ではなく、楽しさを伝えるためには、自身の高い技術が必要であることを自覚しなければならない。

4．教育の成果

⑴達成出来た

・指揮法について、毎回高度な選曲にチャレンジし、自ら進んでより高い水準を目指す意欲が見受けられた。

・人前で、堂々と演奏することが出来るようになり、音楽的技術向上の大切さが理解できたと思われる。

・開発演習において、最初は場面指導が苦手であった学生も、徐々に各場面に対する対応能力が高まってきている。

・計画通り、ロビーコンサート（2年生）・クリスマスコンサート（2年生）・卒業演奏会（４年生）が開催できた。

⑵達成出来なかった

・音楽の専門的な知識や技術を幅広く習得することが出来ていない。（音楽史、音楽理論、音楽ジャンル、演奏法等）

・弾き語りの技術が低い。歌とピアノそれぞれは上達しているが、その二つを同時に演奏する技術が不足している。

5．今後の目標

⑴短期的目標

・学生の向上心を高めるための指導法について、さらに研究する。

・授業における課題の出し方や内容について精査し、より効率の良い方法を研究する。

・学生一人ひとりのニーズに合わせた指導を実践し、個人の力を高める。

⑵長期的目標

・幅広い音楽のニーズに応えられる教育環境の整備を進める。

・音楽を通して、地域社会との連携を図り、社会とともに発展できる環境づくりに努める。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・マーチングバンド部の実績

・音楽専修の実績

マーチングバンド部における実績(2023)

【入部者数】

2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
23 名	21 名	30 名	23 名	16 名	28 名	30 名	18 名

2022 年	2023 年
23 名	17 名

【就職先】

	2022 年	2023 年
教員（幼保・講師含む）	6 名	6 名
公務員	0 名	1 名
企業、看護師、その他	5 名	11 名

	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
教員（幼保・講師含む）	7 名	5 名	5 名	5 名	3 名
公務員	3 名	1 名	3 名	1 名	1 名
企業、看護師、その他	13 名	15 名	22 名	17 名	11 名

【大会結果】

	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年
関西大会	ステージ全国	ステージ全国	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位
全国大会		審査員特別賞	銀賞 10 位	銀賞 7 位	銀賞 7 位	銀賞 7 位	G.P.賞

	2021 年	2022 年	2023 年
関西大会	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位
全国大会	金賞 5 位	銀賞 6 位	金賞 5 位

【社会貢献】2014 年～2023 年

＊クリスマスコンサート（仙台市仮設住宅）＊学校法人奈良学園 50 周年記念式典＊奈良学園大学学歌作曲＊王子町ミルキーウェイ＊平群町時代祭行列＊こおりやま音楽祭“楽”＊三郷町給食センター新築記念式典＊三郷町新道路開通記念式典＊登美ヶ丘フェスタ＊飛鳥リレーマラソン＊三郷町 2 デイウォーク＊三郷キャンパスお花見会＊大和川清掃ボランティア＊鳥取商業高校吹奏楽部演奏会ゲスト＊奈良学園幼稚園夕涼み会＊2000 人の吹奏楽ゲスト＊赤い羽共同募金オープニングセレモニー＊日本人間教育学会シンポジウム＊エコパマーチングフェスティバルゲスト＊天満警察署防犯パレード＊名古屋マーチング＆バトンウェーブゲスト＊王子町吹奏楽祭＊第 32 回国民文化祭なら 2017＊まつり in ハワイメインパレード＊KCN テレビ出演＊ひらかたパークイベント出演＊奈良クラブイベント出演＊感謝を伝えるコンサート開催＊奈良クラブ J3-2023 オープン戦出演＊スーパトップバンドコンサート in 北九州ゲスト出演＊奈良クラブ J3-2024 オープン戦出演

＊いしかわ百万石国民文化祭・マーチングバンドの祭典出演＊10 周年記念演奏会開催＊鈴蘭館イベント出演＊

音楽専修における実績

【入学者数】

2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
7 名	10 名	18 名	15 名

2022 年	2023 年
18 名	14 名

【就職先】

	2022 年	2023 年
教員（幼保・講師含む）	3 名	3 名
公務員	0 名	0 名
企業、その他	3 名	11 名

【社会貢献】

2018 年	・三郷町 PV「きらきら星」作成・り～べるカレッジ和＆輪コンサート
2019 年	・子供フェスティバル出演（近鉄百貨店）
2020 年	・三郷町 PV 第 2 弾「Get Through」制作
2021 年	・音楽でつながろう in NGU（新型コロナ感染症の影響で中止） 代わりに、登美ヶ丘カレッジ「室内楽の調べ」として、教員が開催。
2021 年	・ブランディング広報の取り組み「Get Through ～あなたと共に～」。音楽専修の学生とマーチングバンド部による路上ライブを計画。 （新型コロナの影響で未実施）
2022 年	・オープンキャンパスにおいて、ピアノによる Well come 演奏を行う。 ・12 月 16 日に 3 号館 1 階において 2 年生がロビーコンサートを開催する。 ・12 月 23 日に 3 号館 1 階において 2 年生がクリスマスコンサートを開催する。 ・1 月 20 日に 3 号館 1 階において 4 年生が卒業コンサートを開催する。
2023 年	・オープンキャンパスにおいて、ピアノによる Well come 演奏を行う。 ・7 月 21 日に 3 号館 1 階において 2 年生がロビーコンサートを開催する。 ・12 月 9 日に開催した合格者「ウェルカムイベント」において、フルート演奏を行う。 ・12 月 22 日に 3 号館 1 階において 2 年生がクリスマスコンサートを開催する。 ・2 月 3 日に文化高校において 4 年生が卒業コンサートを開催する。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	岡村 季光

1．教育の責任

・担当授業科目

発達・教育心理学［A（初等）／B（中等）］，教育相談の理論と方法［A（初等）／B（中等）］，子ども家庭支援論，子どもの理解と援助，人間教育学ゼミナールⅠ（基礎），人間教育学ゼミナールⅡ（応用），卒業研究

・各種学生支援

乳幼児教育専修長として，専修内全体のとりまとめを行っている。

2．教育の理念・目的

・自らの教育理念と目的

奈良学園大学人間教育学部のアドミッションポリシーである「社会の中で一人の人間」として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする，柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた「教育者」（広く社会の教育活動にかかわる人材）の養成

・価値観･信念

大学生は青年期後期という発達段階にあり，かつ成人を迎える者であるという認識に立ち，学生とかかわる。

3．教育の方法

・学生との接し方

大学生を大人としてかかわる。また，自主性を重んじるとともに学生として果たすべき責任を遂行することを求める。

・授業の工夫（授業の方法，内容等）

講義系の科目は必ず毎回の授業の見通しを持ってもらうために，必ずレジュメを作成し，PowerPointを用いてできるだけ例を多用しながら授業を進める。

・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加

FD/SDに関する情報は積極的に収集している。

・自らの専門分野の成長

常に最新の動向をつかむため，心理学系の学会には毎年必ず参加する。

4．教育の成果

・達成できたこと，できなかったこと（達成レベル）

前年度における定期試験の正答率を基に，毎年授業内容の見直しを行うが，未だ発展途上にある。

・授業アンケートの結果

各項目について，おおむね学内における平均値付近であった。

5．今後の目標

・短期的目標

前年度の結果を受け，特に授業後の復習について充実を図ることを目指す。

・長期的目標

当該教科における最新の動向も盛り込みながら，授業内容のより一層の充実を図っていく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・いくつかの科目についてのシラバス

本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。

・各種学生支援の内容

Active Academyに登録されている指導記録を参照のこと。

・研修会や学会への参加状況

毎年複数回対面またはオンラインの研修会や学会に参加を行っている。

・いくつかの科目についての授業アンケート等

本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	住本克彦

１．教育の責任

私は本学において、人間教育学部の専門教育科目のうち、教育実習事前事後指導（小）、人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、教育実習Ⅰ（小）、教育実習Ⅱ（小）、教職実践演習（幼・小）、以上必修科目。教職入門Ａ（初等）、教職入門Ｂ（中等）、生徒指導・進路指導論Ａ（初等）、生徒指導・進路指導論Ｂ（中等）、教育社会学Ａ（初等）、教育社会学Ｂ（中等）、以上選択科目等、主に教職科目を担当してきている。専門である「教育学」「生徒指導」「進路指導」「学校カウンセリング」等を活かし（参加型・体験型での事例検討、ＩＣＴ活用、開発的カウンセリング技法導入等）、主体的・対話的で、深い学びの実現が図れるような授業展開を常に意識しながら、主に学生に、教育実践力を養うような学びを実践している。

２．教育の理念・目的

私は、本学の教育活動において、以下の３点を重視している。

1)人間的社会的に成熟した人を育て、教育に対する使命感と情熱をもち、子どもと教育的な関係を築く力を培う教育を展開する

2)教育の専門家として各教科の内容及び指導法を実践的に深め、個々の子どもを理解し一人一人を生かすとともに集団を指導する力を身につける教育を実践する

3) 主体的に学ぶ意志、態度、能力などの自己教育力を持ち、他者と連携しチームとして活動できる力を身につける教育実践を遂行する

３．教育の方法

上述の教育理念を達成するため、次のような授業を行っている。

1)人間的社会的に成熟した人を育て、教育に対する使命感と情熱をもち、子どもと教育的な関係を築く力を培う教育を展開する

⇒ＮＩＥ（Newspaper in Education）導入で、社会常識を養わせる。また、最新の新聞記事から、現代の教育課題に向き合わせ、グループ学習の中で、教育のあるべき姿を追求する場（参加型・体験型での事例検討　等）を設定する。さらに、子どもとの教育的関係づくりのために、構成的グループエンカウンター技法を活用する（「構成的グループエンカウンター公認リーダー」有資格者）。

2)教育の専門家として各教科の内容及び指導法を実践的に深め、個々の子どもを理解し一人一人を生かすとともに集団を指導する力を身につける教育を実践する

⇒指導者自身が担当科目での指導内容の精選や、指導法の工夫（授業導入時でのねらいの確認や見通し学習、終末時の振り返り学習の実践　等）を示す。また、指導者は、常にカウンセリングマインドを持って、学生一人一人に向き合い、一斉指導、グループ学習、個別学習等、学習形態を工夫し、授業を活性化する。さらに、学生一人一人に本時の目標を定着させるために、また、本時の授業内容等が理解でき、その内容を深められたかを確認するためにも、担当科目毎に、毎時間終末時、レポート課題を課し、指導者が次回授業までに、個別に寄り添ったコメントを各レポートに丁寧に記入し、返却している

3) 主体的に学ぶ意志、態度、能力などの自己教育力を持ち、他者と連携しチームとして活動できる力を身につける教育実践を遂行する⇒自己教育力を持たせるため、まず学習意欲を高めさせる。そのため、体験的学習など学習の手段や方法を工夫する。次に、学習の仕方を習得させる。そのため、基礎的・基本的な知識・技能を着実に学習させてから、問題解決的・問題探究的な学習方法の場を設定する。さらに、自己教育力は、これからの変化の激しい社会における生き方の問題にかかわるものでもあり、学び続けるものこそ教える資格を持つ心構えを持たせるよう、指導者自身が学ぶ姿勢を持ち続ける。また、この自己教育力の要素を育てるためにも、指導者と学生間の双方向学習はもちろんのこと、参加型・体験型での事例検討の実施、インターネット利用などＩＣＴ活用、人間関係づくりに有効な構成的グループエンカウンターの活用など、授業内容・構成に創意工夫を凝らす

４．教育の成果

直近の「学生による授業評価」を以下に取り上げる。〔2023年度後期　奈良学園大学　FD・SD委員会実施の「学生による授業評価アンケート」から〕「生徒指導・進路指導論Ａ（初等）」（2023年度後期授業）人間教育学部月曜5限：人間教育学部4年2名・3年12人・2年38名 ：計52名受講。回答45人。回答率86.5％（感染症関連欠席者複数有り）。全15回対面式授業実施。5段階評価(5:そう思う～1:そう思わない)⇒結果：〇この授業に積極的に参加していたか。=4.65 〇この授業で取り組むべき課題を理解できているか。=4.56　〇教員の説明はわかりやすいか。=4.55　〇授業の要点は明確か。=4.48　〇授業内容の分量は適切か。＝3.97　〇教員の話し方は聞き取りやすいか。＝4.52　〇提示資料はわかりやすいか。＝4.45　〇この授業は総合的に見て満足できたか。＝4.65　等、最後の質問項目の、総合的に見て満足できたかへの回答が、「4.65」であり、ほぼ授業のねらいは達成できたものと考えられる。ＮＩＥ活用、参加型・体験型事例検討、ＩＣＴ活用、開発的カウンセリング技法の活用等を導入し、授業内容や構成等を工夫しながら進めた結果と捉えている。各担当科目において、毎時間終末時のレポート課題への丁寧なコメント記入後のレポート返却は、今後も継続することの必要性は、指導者自身が、学生からのフィードバックにより、次回の授業内容の軌道修正ができることも効果があったものと考えられる。

５．今後の目標

⑴ 短期的な目標

私自身の、市教育委員会「教育委員」、県いじめ問題対策連絡協議会「会長」、県こども家庭センター（児童相談所）「児童虐待等対応専門アドバイザー」、県いじめ問題他遺作連絡協議会「会長」、県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」等の教育実践を踏まえた学生指導を遂行することで、学生自身が、学校現場の様々な教育課題に適切に対応し、チームとして行動することができるようにさせる

⑵ 中・長期的な目標

私自身の、永年のスクールカウンセラー・スーパーバイザー等の教育相談実践活動を踏まえ、学生が、常に子どもの発達に応じた教育実践が構想・遂行できる力、子ども一人一人の内面を見つめ、共感的理解に努めることができる力、そして、他者と連携しながら問題解決に取り組む力を育成する。そのためにも、私自身が、常に組織の一員として、また、カウンセリングマインドを持った教師として、一人一人の学生に真摯に向き合い、心に寄り添った教育実践を心がけたい

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	高岡昌子

1．教育の責任

本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」ということを常に意識して教育活動に携わっている。2024年度に担当する授業科目は、「保育原理」「保育の心理学Ⅰ」「子どもと人間関係」「子どもと人間関係の指導法」「基礎ゼミナールⅡ」等である。これらの担当授業では、どの学生にとっても有益な内容となるように目指して指導を行うように努めている。また私は、本学卒業生が、自分の存在意義を確信し、自己肯定感を持ち、常に多角的に考えて、「人を支える人になる」ことの意義を伝え、社会に貢献していきたいと自ら思って、主体的に行動していくことができるように願って、それらの願いに効果的な教育的関わりができるように努力している。さらに学生たちが幸せな今と未来を生きることができるように常に学生ファーストで学生に関わっている。

2．教育の理念・目的

私は、「現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する」という本学の教育理念を重要視しており、子どもをとりまく社会における多様な問題を多角的に捉えて、柔軟に改善していくことのできる保育者を養成できるように日々努力している。

また私は、本学の使命・目的である「奈良学園大学は、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、高等学校教育の基礎の上に広く一般教養を授けるとともに、社会で必要な実務能力を備え、自らの目標を達成するための実践力を有する人材を育成するために必要な教育・学術研究の遂行によって、社会の発展に寄与することを目的とする。」ということを常に意識して、保育の場で実践力があり実務能力を備えた保育者・教育者の養成に携わっている。

3．教育の方法

・「保育原理」の授業で日本国憲法・子どもの権利条約・児童憲章・児童福祉法・学校教育法・教育基本法等について伝え、子どもの最善の利益を考慮した保育をできる保育者を育むために、各法律や条約が作られた経緯について理解を深められるように歴史的事実や事例を説明して指導している。

・「子どもと人間関係」等の授業において、あらゆる子どもについて多角的に理解していくことのできる保育者を育むために、学生が討論しあったり、発表しあったりする時間をもつようにしており、すべての学生の意見を受け止めて、その多様性を認められるように進めている。

・「保育の心理学」等の授業を通して、保育に活用できる発達心理学の基礎的事項を伝え、すべての人間がそれぞれの発達過程にいると捉えて、一人ひとりの人間の心理を理解して保育を深められるように教育する。

・ 担当する全ての担当授業において、内閣府や厚生労働省、文部科学省等による最新のデータを取り入れて教材をつくるように努めている。

・ 最新の子どもに関わる社会問題や事故や虐待事件等についても取り上げて、学生自身が考えて意見を言う機会をもつことができるようにしている。

・ それぞれの学生がより望ましく自己実現して幸せな未来を生きることができるように心から願い、常に学生ファーストで進路指導や就職支援指導を行っている。そして学生一人ひとりが、自分の存在意義を確信し、自己肯定感を持ち、常に多角的に考えて、社会に貢献していきたいと自ら思って、主体的に行動していくことができるように願って、それらの願いに効果的な教育的関わりができるように努力している。

4．教育の成果

・2023年度末に卒業した学生たちの人間教育学ゼミナールでは、3年次生の時から学生自身の希望する進路にむけて着実に力を培えるように指導し、適切な教材を用意して学生の身近なところに置く等して環境を整え、学生の夢が叶うように学生自身で意欲向上できるように工夫した。そして公立採用試験のWebテスト（SPI3等）においても学生自らの力を一層発揮できるように指導した。4年次生になる直前の春休みからは、実際の奈良市や生駒市の小田原市などの公務員採用試験のエントリーシートの指導を丁寧に行い、一次、二次、三次試験の各段階においてピアノ実技や造形等の実技指導や口頭試問などの指導、そしてリハーサル体験を通しての指導等を行い、ゼミ生全員が各学生自身の志望どおりに合格することができた。

・実習にむけて必要な教育を充実させられるように努力してきた甲斐あって、実習日誌等の記述力等、向上してきたように思われる。

・登美ヶ丘キャンパスに移転し、研究室の前にコモンズがあり、学生とのコミュニケーションの機会や質問を受ける機会も多くなり、こまめに指導できるようになった。また、コモンズ近くにピアノがあり、こまめに指導できるため、学生たちのピアノ技術も一層向上してきたと感じている。

5．今後の目標

・卒業した後に社会人となって困らないように、社会人そして保育者としての資質向上を目指して、在学中の指導を徹底して行っていきたい。

・進路に関しては、学生一人ひとりの希望を第一に考えて、常に学生ファーストで関わり、指導を行う。学生のもともとの夢を断念することなく、夢が叶うように指導と支援を充実させていきたい。そして、無理のない範囲で、公立保育者になりたい、なれるんだと学生が思えるように、希望を捨てずに勉学に励み続けることができるように、正しい情報を伝えて指導をしていきたい。

・学生一人ひとりの学生生活が幸せで充実したものになるように全力で支援していきたい。

・今年度は担当する全ての授業の質を一層向上させて、研究活動も充実させていきたい。

・本学に対する学生の満足度が一層あがるように学生ファーストで関わっていくだけでなく、環境改善につながる活動も続けて行っていきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

2023年度　　授業評価アンケート(集計表)

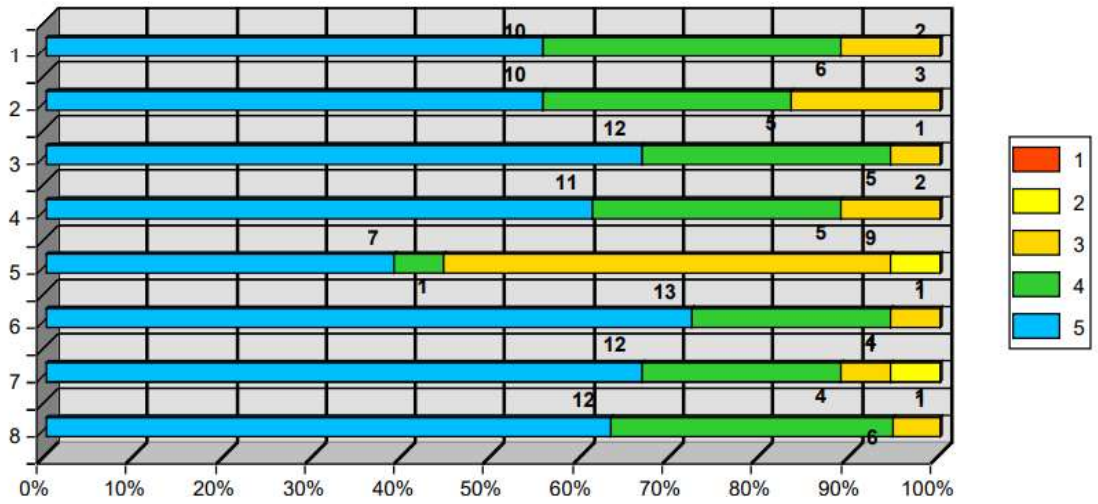
開講年度　2023年度　　火曜日3時限　　高岡 昌子

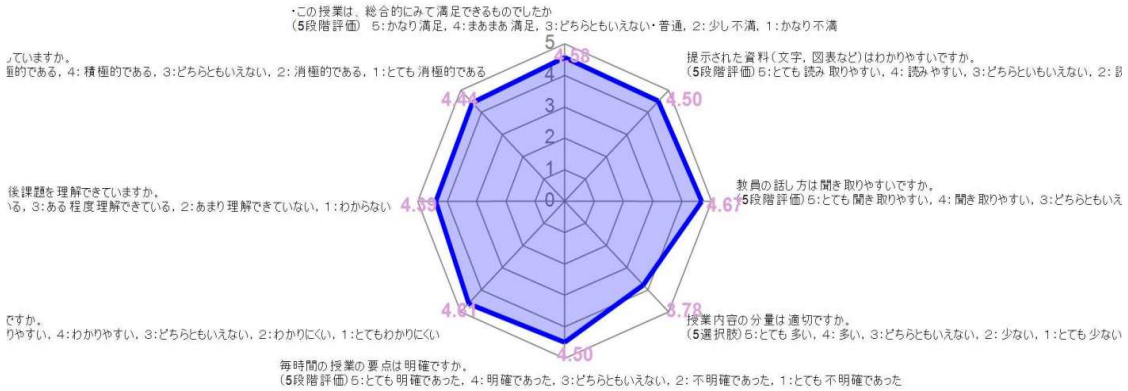
子どもと人間関係

アンケート総数　19 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	10	6	2	0	0	4.44
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	10	5	3	0	0	4.39
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	12	5	1	0	0	4.61
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	11	5	2	0	0	4.5
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	7	1	9	1	0	3.78
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	13	4	1	0	0	4.67
7．提示された資料（文字，図表など）はわかりやすいですか。	集計	12	4	1	1	0	4.5
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	12	6	1	0	0	4.58





「子どもと人間関係」の授業では、総合的満足度4.58で、ほとんどの学生が満足していると回答していた。特に話し方が聞き取りやすく、説明がわかりやすいということであったが、自己評価的にはまだまだ反省も多く、顎関節の体調によって活舌にも問題があると感じており、さらに体調管理を怠らずに精進して、学生に一層満足していただけるように努力していきたい。また「授業内容の分量は適切ですか」が比較的低い評価であったことから、ややたくさんのことを含んでいて大変だと感じている学生がいるのではないかと思われた。しかし、安易に楽すぎる授業にすることもできないと思っている。学生間の課題遂行力における差も大きいため、今後一層学生の様子やニーズを把握し、取り組む課題量にも幅をもたせ自由度をあげることも検討したい。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部（音楽専修）	氏名	辻井　直幸

1．教育の責任

〇担当授業名
・音楽科教育法Ⅰ・音楽科教育法Ⅱ・音楽科教育法Ⅲ・音楽科教育法Ⅳ
・楽典・作曲基礎・作曲応用・人間教育開発演習
・基礎ゼミナール・人間教育ゼミナール・教育実習事前事後指導・教職実践演習
〇授業外活動
・教員養成のための支援授業（GT）・クラブ活動・行事活動
　以上の音楽に関わる授業等を通して、本学の教育理念である「誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材の養成」を目指し、「情操豊かな指導者」の育成を図る。

2．教育の理念・目的

〇音楽教育は人間の心の豊かさを育むものである
・真理探究を日常生活のベースに位置づけるため「より高い価値観」の創造をめざす。
・人として豊かに生きる為には「生涯学習」が不可欠であり、それらは人である以上、「信頼関係(協働の下での自己実現)の上に成り立っている」ということを音楽教育を通して理解させていく。

3．教育の方法

〇明日の音楽教育を支える人材を養成する
・学生への信頼関係づくりからはじめ（どれだけ正しいことを言っても聞く耳をもってなければ意味をなさない）次につなげるためのレディネスを整える。
・知識技能を活用できる「発表の場づくり」を常に念頭に置いた授業の展開
・受動的な教育姿勢を廃止し、自ら考え積極的に参加し協働する授業形態の工夫
・信頼を得るために、まずこちらから全面的に信頼する（個々の学生のもつ可能性を信じる）という基本姿勢

4．教育の成果

〇授業中は、自ら進んで学修する態度が多く見られた。また、授業外でも進んで「先生、指導して下さい！」と声を掛けてくる学生が増えてきた。特に、基礎ゼミナールの授業から、最初は漠然と「音楽関係の仕事に就きたいと」言っていた学生も、個人面談を進めるにあたって、「〇学教員になりたい」と自分の進路について、具体的に考えられるようになってきた。
〇改善点として、一番受講数の多かった「楽典」の授業について考察してみると、意欲的に授業を受け、毎回の確認テストにおいて全員が理解を示していたものの、実際の総括テストでは、まだ全員が100点という結果は得られていない。受講者全員が完全な能力の定着は難しいが、授業後の学習時間の不足は否めないため、改善のための課題レポート等の工夫が更に必要である。

5．今後の目標

〇今後は、更なる「信頼しあえる人間関係の構築」を図り、他者と協働しながら各々の長所を伸ばしていける教育の環境づくりを目指していく。
・短期的には、毎回の授業で積極的な「一人一発表」を目指し、皆で協働しながら学修をサポートしていく。
・中期的には、各授業に対する予備知識や授業後の定着を図る課題の設定を工夫する。
・長期的には、生徒自らが独自の「音楽教育メソード」を開発実演する能力を身に着けさせていく。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

〇参考資料
・シラバス（公開）
・授業評価アンケート

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	中島　栄之介

1．教育の責任

・担当授業科目

人間教育実践力開発演習Ⅳ

特別支援教育総論、病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論、重度・重複障害者教育課程論と指導論

特別支援、特別支援A(初等）、特別支援B（中等）

特別支援教育実習事前事後指導

現代教育課題B（特別支援）

人間教育学ゼミナールⅠ(基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ(応用）、卒業研究

専門職種間連携特論

・各種学修支援

キャリアセンター長（令和4年度まで）

　キャリアセンター長として、教員採用試験、国家試験、就職支援についてキャリアセンターの運営に携わり、学生の希望する進路の実現に向けて組織的・体系的に対応できるように、センター室長と共に各種対策講座、リメディアル講座、模擬試験、相談業務等の連絡調整等を行ってきた。現在は、キャリアセンター長の経験を活かして個別に学生の支援を行っている。

・特別支援教育

特別支援教育担当教員として、特別支援教育に関することや介護等体験についてなどの学修支援を行っている。

2．教育の理念・目的

・自らの教育理念と目的

平成19年より始まった特別支援教育を通して「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる」人材の育成を目指す。学校現場においては、本学の「人を支える人となる」教員の育成を目指す。

「教育に科学とロマン」という本学のモットーの一つに基づき、最新の特別支援教育の成果を学校現場にいかすことのできる人材を育成する。

ICT機器などを用い、適切な支援機器や支援方法などを活用することのできる人材育成を目指す。

・価値観・信念

実務家教員として学校現場の様子を学生に伝えると共に、指導に当たっては科学的根拠に基づき特別支援教育の知識と技能を持った教員養成にあたると共に学校現場の課題を見据えながら研究を進める。

3．教育の方法

・学生との接し方

多様な進路希望に対応するために、学部生としての必要な技能と知識について機会あるごとにふれるようにしている。

また、将来学校現場で働く（ボランティアを行う）ことについて考えながら現場で最低限必要な知識や技能を念頭に置き学修するように意識させるようにしている。

・授業の工夫（授業の方法，内容等）

【特別支援教育に関する総論等】特別支援教育総論　特別支援・特別支援A(初等)・B（中等）、現代教育課題B（特別支援）

平成19年に特別支援教育が始まり特別支援学校や特別支援学級以外でも特別支援教育に関する知識や技能が求められ必要とされている。そこで、特別支援教育に関する内容だけではなく、「障害」についての考え方、就学前・就学中・卒業後の生活、手帳や年金など各種の制度など幅広く「障害」について取り上げ基礎的な知識、考え方について学修を深めたい。

【特別支援教育の各論】病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論　重度・重複障害者教育課程論と指導論

特別支援教育を進める際には、他職種(福祉･医療･保健・労働・行政等)と連携する必要がある。そのため、特別支援教育に限らず、幅広く他職種の専門家と対等に連携できるようにするための知識も必要である。そこで、各論の内容はもちろん、各論を進めるにあたっての基礎知識にもふれながら授業を進めていきたい。障害特性や支援のニーズに合わせた教育課程の編成についての考え方、視点にもふれながら学修を進めていく。各論においては、現在課題となっている重複障害及び、教育課程編成上必要となるカリキュラムマネジメントについても必ず取り上げるようにする。

【特別支援教育実習】特別支援教育実習事前事後指導

特別支援学校での教育実習を行うにあたり、特別支援教育についての専門性を授業の中でどのようにいかすかに加えて各教科の専門性をどのようにいかすかを検討しながら、模擬授業を通して授業の在り方、教材研究の進め方、個別の指導などについて演習を行う。

【卒業研究】人間教育学ゼミナールⅠ(基礎）　人間教育学ゼミナールⅡ(応用）　卒業研究

卒業研究では、何らかの形で「障害」と関係することとしている。学生の興味や関心、将来の進路などにより幅広い内容を取り上げることを予定している。そのため、まず基本的な知識や方法を身に付けるため、課題を調べる、研究方法を理解する、論文通読などを行う

。各回のゼミでは課題と研究の交流について行い学修を進めていく。また、特別支援教育関係の研究室で合同ゼミを実施し研究内容を交流する。
【大学院】専門職種間連携特論
言語聴覚士及び特別支援教育にたずさわる教員としての両立場より、リハビリテーション職とのかかわりを取り上げることを予定している。特に、連携ということを視野に置き、言語聴覚療法、特別支援学校の実際を取り上げ連携の方法について考察していく。
・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加
学内で開催される研修会に参加し、授業の中に取り入れようとしている。
・自らの専門分野の成長
現在、大学院で専門分野について研究を行っている。
学会へも発表を行っている他、学会運営に携わっている。
地域貢献活動として兵庫県言語聴覚士会小児対策部の委員として活動している。

４．教育の成果

・達成できたこと，できなかったこと（達成レベル）
教育の方法については、概ね実施することができている。資料についても実際の教科書（点字等）を提示したり、ICT機器を操作するなど、体験を多く取り入れるとともに文科省通知などの資料もできるだけ提示するなどすることができた。授業資料については、毎回、スライド資料を準備してきた。ICT機器についても、特別支援教育に必要なアクセシビリティ機能などを中心に体験的することができている。
・授業アンケートの結果
授業アンケートについて、全体の評価を上回っているが、授業外の学習時間に課題がある。そこで、各授業ごとにインターネットなどを利用した課題を作成し実施することで、改善していきたい。

５．今後の目標

・短期的
情報が常に更新されていく分野であるので、スライドや授業資料などに最新の情報や時事の話題を入れていきたい。
授業時間外での勉強時間を確保するための課題を工夫する。
・長期的目標
自らの研究の成果を授業に取り入れることで、より実践的で学校現場に即した学修をなるようにしたい。
・発展的
本学が地域の特別支援教育の中心となる様な機能（例えば、特別支援教育センターなど）を有し、地域社会に貢献できるような仕組み作りを行っていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

シラバス、授業アンケート（本学HPにて公開）
キャリアセンターについて（本学HPにて公開）

別記様式第４号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和６年　５月　13日

氏名　根岸　章

研究分野	研究内容のキーワード
数学、情報学、経済学	作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車、ジニ係数

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
（1）数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成19年9月～平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専門科目「情報数学Ⅱ」において、KNOPPIX/MathのCDを配布し、フリーの数式処理ソフトウェアMaximaを用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成22年度からは、学内のパソコンがCDから起動できなくなり、Windows版のwxMaximaを利用するように変更した。 平成25年度からは新規科目「ゲーム数理」においても、3次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立て、平成26年度からは、新課程科目「情報数学Ⅱ」でも、多変数関数の微積分の学習で活用するようになった。
（2）「基礎数学」の科目設置	平成23年4月～平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）の全学共通の導入基礎科目「基礎数学Ⅰ」「基礎数学Ⅱ」を設置し、4月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学Ⅰ」から履修、「基礎数学Ⅱ」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
（3）講義科目「情報数学I」と演習科目「情報数学演習I」の同時受講	平成24年4月～平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の平成23年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成24年度から2年次配当科目として「情報数学Ⅰ」と「情報数学演習Ⅱ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。
（4）講義科目「解析学基礎」における問題作成演習	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」において、中学・高等学校数学を範囲とした問題作成を行わせた。問題作成と同時に対象学年や難易度、解答と解説も行わせ、将来中学校や高等学校の数学教員になる際に必要とされる知識や考え方を学ばせた。
（5）「数学道場」における学び合いの実践	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部中等（数学・音楽）専攻数学専修の学生に対し、相互の学び合いを基本とする学習の場「数学道場」を開き、学生同士の学び合いを推進している。
（6）オンラインによる授業の実践	令和2年4月～令和5年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目、ゼミナール等において、オンラインによるリアルタイムの講義を行うなどを実践した。
（7）復習のためのスライドショーの自動実行	令和4年4月～現在に至る	専門科目で作成したプレゼンテーションファイルを繰り返し自動実行できるように設定し、コモンズ7のモニターで表示することにより、いつでも復習できるような環境を整備した
2　作成した教科書，教材		

（１）「情報数学Ⅱ」	平成25年4月～ 平成29年9月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。2変数関数の微積分を中心として、変数変換や近似計算も扱っている。Maximaの利用により、微積分の具体的な計算よりその意味を考えることに集中でき、また、2変数関数のグラフなどが視覚化されわかりやすくなるなどの教育効果があった。A4判全28頁。
（２）「ゲーム数理」	平成25年10月 ～ 平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成23年度のカリキュラム改革で設置されたゲーム制作で現れる数学のうち、CGの変換の基礎となる数学事項に特化した内容を扱っている。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全111シートである。
（３）「数学の世界」	平成27年4月～ 平成30年9月	奈良学園大学において平成26年度から設置された「数学の世界」（共通教育科目、1年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。幾何、代数、解析の3分野を中心に、「数の世界」、「量の世界」、「形の世界」、「計算の世界」、「変化の世界」と題して数学の諸分野の内容を紹介する。整数の集合など簡単な材料を用いることによって、高校までの数学ではでてこない比較的新しい数学の概念や考え方を、興味をもって学習できるように工夫した。全99シート。
４）「日常に数学をー文理をつなぐ数学教室からー」	平成27年4月～ 平成30年9月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用していた教科書。日常生活に近い場面での数学の活用例を中心に、関数、数列、行列の基礎知識と学びながら応用方法も学んでいく。 物体の動きと微分や、金利と数列、人数の変化と行列などを結び付け、学習者の興味を引き出しながら学んでいけるように工夫している。大田靖氏（岡山理科大学総合情報学部准教授）との共著でA５全169ページで学術図書出版より発行された（ISBN978-4-7806-0464-1）。根岸の担当分は第2部101ページである
（５）「情報数学演習Ⅱ」	平成27年9月～ 平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「情報数学演習Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、１単位）で配布したプリント。平成23年度のカリキュラム改革で設置された情報系で必要とされる数学内容のうち、グラフ理論を扱っている。演習中心に展開しつつ、グラフ理論の基礎用語の説明や、さまざまな定理の証明を実例を交えつつ行い、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全84シートである。
（６）「解析学基礎サプリメント」	平成30年4月～ 令和5年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」で配布したプリント。集合論の基礎から微分のロピタルの定理までをほぼすべてに詳しい証明をつけて述べた。高校数学では単なる計算で終わりがちな微分を、実数の基礎から確認していくことを目的としている。A4で38ページである。
（７）「解析学A（テーラー展開）」	平成31年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学A（テーラー展開）」用に作成したパワーポイントファイル。実数の性質から始め、関数の極限と微分、リーマン積分から線積分までを扱う。高校数学の微積分に現れる定理、性質を詳しい照明を含めて学び、理解することを目的とする。令和5年度は全164シートである。

（８）「確率・統計基礎」	平成31年4月～ 令和4年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「確率・統計基礎」用に作成したパワーポイントファイル。平均、分散等の統計量の意味とその性質、計算方法から確率の公理と2項分布、正規分布による確率計算までを扱う。統計ではグラフの読み取り、確率では種々の法則を公理から導くなど、概念の理解深めることを目的とする。全81シートである。
（９）「確率・統計応用」	令和2年4月～ 令和4年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「確率・統計応用」用に作成したパワーポイントファイル。標本分布の確率的な意味から統計的推定、検定の概論といくつかの方法を具体例を中心に学ぶ。全112シートである。
(10) 「解析学I（ルベーグ積分）」	令和2年9月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学Ｉ（ルベーグ積分）」用に作成したプレゼンテーションファイル。リーマン積分の復習からその欠点を述べ、ルベーグ積分の必要性を学び、可測集合、可測関数を定義してルベーグ積分を導入し、その性質を学ぶ。令和5年度は全163シートである。
(11) 「数学入門 第４版」	令和2年4月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用中の教科書。数の集合の拡張とそれぞれの関係から始め、初等的な方程式の解法や１変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第２版では集合や命題と論理を付録として追加した。第３版では、数値積分を削り、複素数の扱いと数列を追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に１変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 A5全145ページで学術図書出版より発行された。 （ISBN978-4-7806-0788-8）
(12) 「解析学基礎」	令和3年9月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」用に作成したプレゼンテーションファイル。初等関数の微積分の計算から、多変数関数の導入とその微積分である偏微分と重積分の概念と計算までを扱う。令和5年度は全98シートである。
(13) 「解析学B（複素関数）」	令和3年9月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学B（複素関数）」用に作成したプレゼンテーションファイル。複素数とその計算から導入し、複素関数とその微分、積分の計算とその諸性質までを扱う。令和5年度は全129シートである。
(14) 「応用数学Ⅲ（微分方程式）」	令和5年9月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学Ⅲ（微分方程式）」用に作成したプレゼンテーションファイル。微分方程式とは何かから1階正規形微分方程式の初等的解法や微分演算子を用いた定数係数線形微分方程式の解法について扱う。令和5年度は全126シートである。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		

（1）学生の授業評価アンケートの結果	平成27年度前期	最高点4.00で、「数学の世界」の総合的満足度は2.85であり、全体平均の3.29よりだいぶ低い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均は2.31～3.92となり、全体平均と比べ低い項目も高い項目もあった。低かったのは、授業時間外の指導等で、高かったのは、授業中の私語対策などであった。その他の担当科目については受講生が10名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	平成27年度後期	「生活の中の数学」の総合的満足度は3.33であり、全体平均の3.24より若干高い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均も3.33～3.56となり、どの項目も全体平均より高い値となっていた。その他の担当科目については受講生が10名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	令和2年度前期	授業アンケートを行った3科目中、総合満足度が最もよかったのが「確率・統計応用」の4.23であり、この科目はすべての項目が4以上だった。逆に最も悪かったのは「解析学Ａ（テーラー展開）」の3.53であり、資料のわかりやすさ等の項目も3点台後半と若干低めであった。
	令和2年度後期	授業アンケートを行った2科目中、総合満足度が最もよかったのが「解析学基礎」の4.11であり、この科目はすべての項目が4以上だった。逆に最も悪かったのは「解析学Ｂ（複素関数）」の3.39であり、5項目で3点代前半、5項目で3点台後半とあまり良い評価が得られなかった。
	令和4年度前期	授業アンケートを行ったのは「解析学A」のみであった。学習時間以外のすべての項目で学部平均を下回る結果となっていた。とくに差が大きかったのは説明のわかりやすさの項目だった。
	令和4年度後期	授業アンケートを行った2科目中「解析学基礎」については、ほとんどの項目が学部平均と同等の数値となった。「解析学B」はアンケートの回収率が悪かったため、評価できない。
	令和5年度前期	授業アンケートを行ったのは「解析学A」のみであった。学習時間と学修量の適切さ以外の項目で学部平均を下回る結果となっていた。昨年度と比較して学部平均との差は縮まっているが、平均が4を超えるように事業改善を行っていく。
	令和5年度後期	授業アンケートを行った2科目中「解析学基礎」については、多くの項目が学部平均と同等の数値であったが、説明のわかりやすさや、提示された資料のわかりやすさといった項目で、学部平均より明らかに低い数値となった。「解析学B」はほとんどの項目で学部平均と同等より少し下の結果であった。「人間教育実践力開発演習Ⅱ」はオムニバスであるため、自己評価の対象外である。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）「こどもICT講座」	平成29年2月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「こどもICT講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学4年生から6年生16名）

（２）「子どもICT講座」	平成30年2月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「子どもICT講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学1年生から5年生14名）
（３）「たつたクラブ」	平成30年3月～現在に至る	三郷町において、3月より月１回行われている小中学生向けのプログラミング教室にサポーターとして参加している。8月から12月までは月2回のロボットプログラミング教室、および平成31年1月に行われた、競技会に主催者の一員として参加した。以降は、月1回のプログラミング教室を中心に活動し、令和2年2月には、第2回の競技会を開催した。
（４）「AIと囲碁」	平成30年6月	奈良県王寺町り～べる王寺において、王寺町と奈良学園大学の主催で行われた「第27回大学と地域をつなぐ公開講座『り～べるカレッジ』」において標記のテーマで講師を務めた。AIとその発展史を概観し、近年のキーワードとしてディープラーニングを取り上げた。合わせて、囲碁AIの開発史を概観し、モンテカルロ法とディープラーニングにより、急速に強さが増していったことを見た。その後、Excel上で簡単なニューラルネットワークモデルを作成し、ソルバー機能を用いて最適化を行うディープラーニングの実例を取り上げた。 （聴衆は地域の高齢者の方を中心に15名程度）
（５）「数式処理ソフトの使い方」	平成30年10月	奈良県立高取国際等学校で行われた進路相談会の模擬講義において、標記のテーマで講師を務めた。導入としてAIの発達による各種の職業の将来性について、野村総合研究所の発表をもとに解説した。その後、高校1、2年の数学の内容を数式処理ソフトMaximaを使いながら概観し、数式処理ソフトを使った授業法について述べた。 （受講者は高取国際高校の2年生8名）
（６）2019年春期　奈良学園公開文化講座 「第31回　《小学生と学ぶロボットプログラミング》」	令和元年6月	志賀直哉旧居（奈良学園セミナーハウス）で行われている奈良学園公開文化講座の一環として行った講座。 2020年度の小学校の「プログラミング」必修化に向け、その経緯と在り方やプログラミングとは何かを概説し、ビジュアルプログラミング言語であるScratchの使い方や、ロボットプログラミングを説明し、参加者とともにロボットの作成、プログラミングを行った。 （受講者は地域の小学生やその保護者を中心に17名）
５　その他		
特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　資格，免許		
高等学校教諭第一種免許（数学）	平成2年3月31日	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）
２　特許等		
特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
（１）インターンシップ科目検討ワーキンググループ	平成23年8月～平成27年2月	インターンシップ実習の単位化にあたり、科目の内容、実施方法の検討を行った。その後、平成25年度は2年次生配当科目「インターンシップⅠ」
（２）情報学部長	平成27年4月～平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の学部長を務めた。
（３）情報センター長	平成29年4月～平成30年3月	奈良学園大学情報センター長を務めた。

（４）人間教育学部評議員	平成30年4月～令和3年3月	奈良学園大学人間教育学部の評議員を務めた。
（５）自己点検・評価委員会委員長	平成30年4月～令和4年3月	奈良学園大学自己点検・評価委員会の委員長を務めた。
（６）三郷町文化振興財団理事	平成30年6月～現在に至る	三郷町文化振興財団の理事を務めた。
（７）三郷町ICT学び推進協議会委員	平成30年7月～現在に至る	三郷町ICT学び推進協議会の委員を務めた。
（８）大学機関別認証評価　評価員候補者	令和2年4月～令和4年3月	公益財団法人日本高等教育評価機構の評価員候補者として登録された。
（９）奈良学園大学学長補佐	令和3年2月～令和4年3月	奈良学園大学学長補佐に任命された。
(10) 財務委員長	令和3年2月～現在に至る	奈良学園大学財務委員会の委員長を務めた。
(11) 人間教育学部学科長	令和3年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学科長を務めた。
４　その他		
特記事項なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共著	平成27年3月	学術図書出版社	（再掲のため略）
2 数学入門（第4版）	単著	令和2年4月	学術図書出版社	（再掲のため略）
3				
:				
（学術論文）				
1 有限グラフ上の量子ウォークについてIII：Propagator Setの次元	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.91-96	有限グラフ上の量子ウォークについて、量子ウォークのPropagator Set の定義を与え、実パラメータの自由度を次元として Propagator Set の次元を与える定理を示した。また、瀬川、鈴木両氏の"Generator of an abstract quantum walk."における定義と根岸の定義の違いについて考察した。
2				
3				
:				
（その他）				
1 奈良産業大学（現奈良学園大学）インターンシップ第2期実施報告 :研究ノート	共著	平成27年9月	奈良学園大学紀要第3集 pp.209-227	平成24年度から奈良産業大学で実施された単位化された科目としてのインターンシップについて、その導入の経緯から実習後の教育効果までを記述した研究ノート。山本英司氏（現金沢星稜大学経済学部教授）との共著で、根岸は主にデータの解析とその分析結果の記述を担当した。
2 奈良産業大学「基礎数学」の報告と分析 :研究ノート	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 pp.197-211	奈良産業大学（現奈良学園大学）で平成23年度から平成27年度にかけて実施した数学の導入教育について、科目の到達目標の設定段階の状況報告から実施後の学生の成績に基づく分析までをまとめた。
3 解析学における高大連携の私論（その１） :論考	単著	平成27年11月	教育PRO第45巻25号p.16-17	数学の高大連携において、解析学に重点を置くことの意味を示し、いくつかの数学用語についての高校と大学での違いを述べた。
4 解析学における高大連携の私論（その２） :論考	単著	平成27年12月	教育PRO第45巻27号p.16-17	数学の高大連携において、微分と積分において、高校段階で注意すべき点をいくつか示し、それらが大学でどのような意味を持つかを述べた。
5 トルク差を利用した垂直軸風車について :口頭発表		平成26年9月	2014年夏の作用素論シンポジウム　於：セミナー・カルチャーセンター臨湖	垂直軸風車において、羽の両面の形状の違いによるトルク差を利用するアイデアを提唱し、その数値計算例を与えた

6 垂直軸風車の周速比の計算例 :口頭発表		平成27年9月	2015年夏の作用素論シンポジウム　於：福井県フェニックスプラザ	トルク差を利用した垂直軸風車について、周速比の計算例を与えた。
7 量子ウォークの時間発展の次元について :口頭発表		平成28年9月	2016年夏の作用素論シンポジウム　於：米子コンベンションセンター BiG SHiP	U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数nの有限グラフ上の量子ウォークの時間発展となりうる行列の集合の幾何学的次元とその条件を与えた。
8 量子ウォークのPropagator Setの次元について :口頭発表		平成29年7月	2017年夏の作用素論シンポジウム 於：伊勢市観光文化会館	量子ウォークのPropagator Set の定義を与え、U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数nの有限グラフ上の量子ウォークのPropagator Setの幾何学的次元に関する定理を示した。
9 羽根と質点の衝突から導出される方程式 :口頭発表		平成30年9月	2018年夏の作用素論シンポジウム 於：徳島市シビックセンター	空気分子が風車の羽根に与える角運動量とエネルギーの保存則から風車の羽根の形状の運動方程式を導出した
10 Introduction to Open Quantum Walks :口頭発表		令和元年9月	2019年夏の作用素論シンポジウム 於：和歌山ビッグ愛	2000年代初期からのUnitary Quantum Walksの様々な定義を紹介し、その後Open Quantum Walksの定義を述べUQWとの違いを述べた。
:				

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	長谷川栄子

1．教育の責任

（1）担当授業科目

①司書教諭免許取得に係る科目

・学校経営と学校図書館　・学校図書館メディアの構成　・学習指導と学校図書館　・読書と豊かな人間性

②専門科目

・人間教育学ゼミナール（基礎）　・人間教育実践力開発演習Ⅱ　・教育実習事前事後指導（中・高）

・国語科教育法Ⅰ　・教職実践演習（中・高）

③共通教育科目

・文学

（2）学生支援

・オフィスアワー　・勤務時間内（9:30～16:30）で研修日と授業時間以外随時

2．教育の理念・目的

・人の支えになる人や教員を目指す学生を支援するため、実務経験を活かし、他者への思いやりを忘れず、AI時代において生涯にわたって学び続ける人材を育成する。中等国語専修の一員として教職員と連携し、粘り強く前向きな姿勢で職務に取り組む。

3．教育の方法

（1）学生との接し方

・先に挨拶の声を掛け、関係づくりを図る。リフレクションシートから授業中の努力を認め、授業態度や提出物の提出状況から学生の困り感を推察し、相談に乗る。以上の2点を心掛けている。

（2）授業の工夫

・主体的な学修にするために、授業内容や目標を明示し、リフレクションシートの内容を交流して各自の努力を認め、他者からの学びを自覚させている。また、記述力を向上させるためのポイントを示し、レポートが書けるように配慮した。レポートやリフレクション等に対してコメントを付け、個人的にも双方向のやり取りを行っている。そして、授業の事前事後に授業テーマに関連する参考資料を読むことを推奨している。大学図書館に展示コーナーを学生が設けられるよう指導し、協働参画の充実感を味わわせた。

・対話的な学習にするために、自己学修の時間を取った後にグループでの交流を行い、全体報告し、考えを共有する時間を設定している。多様な言語活動を行い、テクスト、自己、他者との対話が図られるようにした。

・深い学びをめざして、授業で扱ったテーマについてさらに文献で調べ、レポートを書いて自分の考えを表現させるようにしている。

（3）内外の研修会への参加

・学内における研修会には、欠かさず参加し、ICTを活用した協働的な事務作業の在り方や指導法等を模索した。

・学外の研究会において、国語科におけるICTを活用した効果的な指導法を研究している。

（4）専門分野における成長

・諸論文を参考にし、昨年度より授業内容を深め、多角的な視点から講義できるよう努力している。

4．教育の成果

（1）成果

・授業で学生に模擬授業させる場合には、事前指導を重ね、実践させることによって、学生は授業を実践した達成感を味わっている。授業参観の視点を明確に示し、批評会を重ねることを通して、学生たちは、相互に学び合い、授業力が向上した自己を発見していた。

（2）課題

・1時間の講義内容に関して、さらに専門的な知識を得、発展的な学修ができるよう複数の参考資料を提供する。

・よりわかりやすい授業内容の説明を目指す。

5．今後の目標

（1）長期的目標

・中等国語専修から教員になる学生を一人でも多く育てられるよう、中学校・高等学校の国語科教育の専門性を深めると共に教員採用試験合格に向けた対策を練る。

（2）短期的目標

・中学校の国語科においてICTを活用した国語科教育法を研究する。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

（1）シラバス（奈良学園大学HP参照）

・国語科教育法Ⅱ　・学校経営と学校図書館

（2）授業アンケート（奈良学園大学HP参照）

（3）学生支援の内容

・進路についての相談　・レポート作成についての相談　・学校ボランティアについての相談　・教育実習における指導案作成

（４）講師依頼

・奈良県読書推進事業企画運営委員会委員長　・奈良県学校図書館担当者研修会講師・奈良県子ども読書活動推進フォーラム講演会講師

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	松井典夫

1．教育の責任

○ 担当授業科目

教育課程論A（初等）／教育課程論B（中等）／図工科指導法／
／現代教育課題C（学校と安全）／特別活動及び総合的な学習の時間の指導法A／教育実習事前事後指導（幼小）／教育実習（小）
／教職実践演習

○ 各種学生支援

・学生支援センター長として、学生相談機能の充実、学生生活満足度の向上の取り組みをしている。
・FD・SD委員会委員長として、学生と教員の教学コミットメントに努めている。
・硬式野球部部長として、野球部学生のケア、指導を行っている。
・3回生、4回生のゼミにおいて、教員採用試験対策を実施し、採用試験への合格へと進めている。

2．教育の理念・目的

○ 自らの教育理念と目的

「よき社会人」として、グルーバル・パースペクティブを持った教員を育成する。「教師であり続ける」力を育成する。

○ 価値観･信念

教育はもっともイノベーションが起こりにくい。これは、「古き良き」価値から動かないからである。その視点に立ち、これからの時代を担う学生を育て、これからの時代の教育を見つめ、これからの時代の教師を育てていく。

3．教育の方法

○ 学生との接し方

学生は「ひとりの大人」である。学生を大人として尊重し、自主性を重んじて接していく。

○ 授業の工夫（授業の方法，内容等）

「つまらない授業はしない」「同じ授業の繰り返しはしない」

そのためには、自身の研究を常にブラッシュアップさせることが大切である。その研究の成果から、理解と関心を促進するプレゼンテーションを作成して授業を進めるとともに、専門的な知識、技能を持って学生の関心を喚起する。また、アクティブ・ラーニングを意識し、深く思考する場面を設定する。

○ FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加

FD/SDに関する情報は積極的に収集している。

常に多くの文献、論文、先行研究に触れ、常に自身の研究を深め、広げていく。

4．教育の成果

○ 達成できたこと，できなかったこと（達成レベル）

概ね達成できている。

○ 授業アンケートの結果

高い評価を得ている。

5．今後の目標

○ 短期的目標

授業評価の結果を受け、とくに授業前の予習の必要性を持った授業内容を構成していく。

○ 長期的目標

当該教科における最新の動向も盛り込みながら，授業内容のより一層の充実を図っていく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	名前	森一弘

1．教育の責任

担当授業科目

・体育科指導法　　・体育実技の指導法　　・特別活動及び総合的な学習の時間の指導法　(A)　・人間教育実践力開発演習　ⅠとⅣ

・基礎ゼミナールⅠ　・教育と日本の伝統文化　　・人間教育学

以上の科目を担当している。受講学生の中に将来、小学校・中学校の教員になりたいという希望を抱いている。私の専門である、小学校体育、総合的な学習の時間、特別活動などの指導法を中心に、科目の目的、指導内容、評価方法等を学び、子どもたちに、主体的に取り組んでいくことの意義を教えて欲しいと願っている。

特に体育科指導法・体育実技の指導法に関しては、体育科教育の本質を学生に伝えている。特に体育科の見方・考え方を捉えて、生涯スポーツにつながるようにするための指導法を指導したい。

2．教育の理念・目的

私の教育理念・目的を学部のディプロマポリシーに則り、次のような学生を育成したいと考えている。

教育理念として、体育科教育を主として考えると教師にとって必要な資質は、教科の指導力（内容・方法）、社会性の指導力、子どもへの情熱・愛情などである。これらの資質を、実務家教員として現場からの具体的取り組みを通して指導し、将来「子どものための学校づくり」を実践できる教育者を育てたい。

具体的な目的となるものは、次の７点である。

①広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟している

②教職に対する使命感をもち、児童生徒に教育的な愛を持って接することができる

③学校現場の様々な教育課題に適切に対応し、チームとして行動することができる

④子どもの発達に応じて授業を構想し指導を工夫する教育の専門家である

⑤自己の学習を振り返り、理論と実践を結びつけた研修を継続的にできる

⑥保護者や地域の人等、学校外の人等と広く連携する力を身につけている

⑦日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につけている

3．教育の方法

①広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟している学生の育成のために

授業内でなるべく対立する教育の概念、考え方とそれに関連する事例を提示して、学生がディスカッションし易いテーマを授業内容に選定する。

②教職に対する使命感をもち、児童生徒に教育的な愛を持って接することができる学生の育成のために

④子どもの発達に応じて授業を構想し指導を工夫する教育の専門家である学生の育成のために

指導計画を立てる時に、「できない子」「わからない子」に視点を当てさせ、具体的な声かけ、指導の方法を検討させる。また模擬授業終了後の検討会においても、評価Cへの子どもへの指導者としての言葉がけ、立ち居振る舞いを検討させる。そのことによって学生が自ら考え行動する姿勢を身につけさせる。

③学校現場の様々な教育課題に適切に対応し、チームとして行動することができる学生の育成のために

⑤自己の学習を振り返り、理論と実践を結びつけた研修を継続的にできる学生の育成のために

模擬授業を検討するチームを作り、学生間で対話的活動を取り入れディスカッションをしながら指導案を作成させる。また、模擬授業終了後リフレクションシートを全員に書かせ、交流する場面を取り入れていく。このことにより、仲間と課題を共有し、その課題を解決していこうとする姿勢を身につけさせる。

⑥保護者や地域の人等、学校外の人等と広く連携する力を身につけている学生の育成のために

実務課教員として、実際にあった保護者・地域の人々との活動や問題となった点を教材化し、学生に考えさせる。また、考え体験や具体的な取り組みを交流させ、他者の思いを受け止めさせるような取り組みを行う。

⑦日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につけている学生の育成のために

運動会の歴史、徒手体操の歴史、学習指導要領の変遷などを教材として扱い、日本の体育教育の歴史を知らせることにしている。また、新スポーツ、新しい種目の紹介や実際に体験させ、多様性をテーマにした教材も用意していくことにしている。

4．教育の成果

2023年度前期体育科指導法の「学生による授業評価アンケート」の結果の総合的に見て満毎できるという評価はは4.5であった。

授業において技能面の指導の仕方として例えばプール指導において水泳指導の具体等を示すこと、そして学生に体験させることができ、指導効果が高まったと考えている。今後も、学生が学校現場に出た時に指導に困らないような知識や技能を身につけさせるよう、課題を持って授業に取り組ませたい。

５．今後の目標

短期的・長期的ということも含め、次のことを成果として出していきたい。

・教員への志願者数を定員の６割以上にしていく。

・教員志願者の６割が教員採用試験に合格していく取り組みを行う。

入学定員を満たすためには、上記のように、教員採用の合格率として70％以上となるような取り組みや、日々の授業において「教員になる意欲」を高めれれるような授業・実習・演習での指導を行いたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・学生評価アンケート

・シラバス（公開）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	青山　雅哉

1．教育の責任

・器楽演習Ⅰ（鍵盤楽器）　・器楽演習ⅠA（ピアノ）　・器楽演習ⅡA（ピアノ）　・音楽表現ⅠA（ピアノ・歌）　・音楽表現ⅡA（ピアノ・歌）　・キーボードハーモニーⅠ　・キーボードハーモニーⅡ　・ソルフェージュⅠ　・ソルフェージュⅡ　・器楽特殊演習ⅠA（ピアノ）　・器楽特殊演習ⅡA（ピアノ）・人間教育実践力開発演習Ⅱ　・器楽合奏Ⅰ（和楽器を含む）　・器楽合奏Ⅱ　・器楽合奏Ⅲ　・器楽合奏Ⅳ

・その他　音楽専修GTでのピアノレッスン

2．教育の理念・目的

総合的な音楽理解と音楽表現力を深め、音楽教育の場における柔軟な教育力、高度な実践力さらに豊かな人間力を身に付けた教育者の養成を目指している。学生個々の理解力や基礎力を考慮し、個々に応じた課題への対応や個別指導のレッスンを授業時間外の時間を利用して行っていく。

3．教育の方法

器楽演習、音楽表現等の授業ではピアノを中心にした基礎的な演奏や弾き歌いの技術と表現について学生個々の力に応じた指導を行っている。ソルフェージュでは聴音による音への感性を高め、初見演奏での読譜能力向上を目指している。キーボードハーモニーではメロディーへの伴奏付けやコードによる即興演奏により音楽創作への基礎的理解と技術力の獲得を目指している。器楽合奏では実践を通した気づきを各学生が発表していくことで指導方法への理解を深めるようにしている。器楽特殊演習では音楽演奏の実践を計画し、そのための練習内容を学生達が互いに検討していくことでその効果や指導方法への理解を深め、さらに音楽演奏の実践を通して音楽への総合的な能力の向上を目指している。全ての授業において現場で必要とされる音楽力の育成、向上を目標として毎回授業内容に即した課題を時間外学習として提示し、次回の授業においてその準備を前提にした授業展開を行うことで時間外学習の徹底を図っている。また、音楽専修のGTとしての取り組みとしてピアノ奏法の向上を希望する学生にピアノレッスンを行っており、音楽教育者を志望する学生達の能力向上に対する支援をしている。

4．教育の成果

学生個々のレベルや能力に合わせた指導方法により学生各自の学修意欲の向上がみられる。一方、音楽について基礎的理解や技術への学修に大変時間を要す学生には個別に対応してはいるが、その効率的な指導方法については今後の課題としている。

5．今後の目標

学生個々のレベルや能力に入学前からの音楽経験上の違いによる開きがあり、共通した教育では一律に学びの機会とはならない面を改善をしていく。そのために学生達が互いに教え取り組んでいく環境を整えていくことで、共通した教育力を身に付けていく機会としていきたい。音楽専修学生への学修成果や目標設定へ効果を期待し、ピアノグレード制への検討を進めていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・器楽演習課題曲グレード表　・授業成果としての演奏録音

学部・学科	人間教育学部	氏名	善野八千子

1．教育の責任

私は本学において、小学校一種免許取得に関わる専門科目及び演習科目を担当している。
中でも「教育行政学A（初等）」、「生活の理解」、「生活科指導法」、「人間教育実践力開発演習Ⅲ」「教育実習事前事後指導（小）」「教育実習」「教職実践演習」を教育している。
また、課外においては、教員を志望する学生の１・２年次生には基礎学力の定着のための学修方法の工夫や学習習慣の相談について指導している。さらに、３・４年次生に対しては、面接指導及び場面指導、模擬授業などの個別指導を意欲の継続や心のケアなど、年間を通して採用試験直前または当日、卒業後の指導まで、当該学生等の要望に応えた指導を継続している。

2．教育の理念・目的

私は、本学の教育活動において、以下の３点を重視している。
1)教員免許を取得する学生としての人間力の向上
2) 教育現場で求められる教育実践力の育成
3) 社会に貢献し、時代の進展に対応する豊かな表現力の養成

3．教育の方法

上述の教育理念を達成するため、小学校教員１種免許取得に関わる「教育行政学A（初等）」及び「生活の理解」「生活科指導法」、並びに「人間教育実践力開発演習」「教育実習事前事後指導（小）」「教職実践演習」では、次のような授業を行っている。
これらの科目では、実習及び学校現場で活用できる実践力や表現力の育成を目標としている。そのため、教育の現場で直接的な関わりの深い実践事例や教育課題を取り上げ、子どもの発達に応じた基本的な知識及び実践を交えて教授している。さらに、学校間接続や保護者対応への実践に結びつくよう図っている。
また、人間関係構築や相互評価を意図したグループワーク、毎回の授業時での教員または学生自身の体験と表現の場を設けるようにしている。
学生個々の理解力や学びの基礎力を考慮し、個別の理解度を確認するために、リフレクションシートへのコメントや優れた記述紹介により意欲や全体の質向上につなげている。さらに、毎回授業内容に即した課題を授業時間外の時間を利用して個人指導を継続している。
29年間の小学校教員及び管理職、教育委員会事務局主任指導主事として、特に生活科移行期から幼小接続カリキュラム改善に着手し、「教育行政」の実際と「学校経営」「学級経営」及び教員の資質向上等の研究に取り組んできた。これらの現場経験を生かし、教科等の知をどのような活動を通して学校教育現場の実際の課題解決と合致させる具体的な指導をする。
1点目は、ICT活用して、学校現場のニュースや法令から情報を表出させ、自分ごととして課題解決する展開である。2点目は、新たな知を創出する場面において、自己の変容を言語化させ自覚化を図る必要性を実感させる。とりわけ、教育を巡る今日的な課題及びその課題解決のための対応策についてアクティブラーニングをもとに学修を深める。
教育改善への取り組みとして、学内で開催されるFD研修には全て参加している。また、授業公開・見学も時間をやりくりして参加し、他の授業科目の進め方や学生の取り組み方等の参考点を探している。
教員個人としては、授業評価アンケートの結果を受けて、その期の授業について反省を加えている。また、毎年の年度末のシラバス提出時に、次期の授業内容・授業展開について、授業時における学生の反応も参考にしながら、新たに学会や研究論文から得た知見及び教育方法を更新したシラバスとなるよう努めている。

4．教育の成果

【2024年度後期授業評価アンケート】の結果においては、全ての質問項目において全体の平均値より高い結果が出た。
「生活科指導法」について、3つの担当時間ごとに述べる。火2限・履修16名の中16名（100%）が回答「総合的な満足度4.75」、水３限・履修19名の中19名（100%）が回答「総合的な満足度4.42」、木2限・履修13名の中13名（100%）が回答「総合的な満足度4.85」、いずれも全体平均と比較して満足度が高かった。学生による意見記述は以下の原文。火2限の意見の記述は、3点で①「模擬授業を沢山見ることができ、良いところは自分の授業に取り入れて、改善点は自分の授業ではしないようにと、模擬授業で自分の授業にとても自信がついた。」②「教師として必要なことを細かく教えてくれるのでとてもいい。」③「とてもわかりやすくてよかった。」、水3限の意見の記述は以下の６点で①「生活科の指導方法をはじめ、さまざまな教科で使える指導方法を学ぶことができました。」②「基礎的なことを教えてくれた。」③「教師としての能力がとても成長できた。」「たくさんのことを学べた」④「言葉遣いがとても参考になった」⑤「指導案の書き方を最初から最後まで丁寧に教えてくれるところがとても良かった。また、良かったことを褒めてくれ、反対に悪かったことに対しては注意したりアドバイスをしたりしてくれるので、とても向き合ってくれていると感じた。」⑥「できていない学生への対応の時間が長い。」、木2限の意見記述は以下の5点で①「指導がとても丁寧で、模擬授業の準備期間も長くあり、とても積極的に取り組むことができた。」②「少人数で授業ができたこと。」③「指導案の作成について授業内で丁寧に説明があり、とても分かりやすかったです。」④「 少人数での授業だったので、質問しやすかったです。」⑤「授業を通して、生活科の授業では体験活動を取り入れることが低学年では重要であると実践的に学べた点。また、教師が授業でどのように児童と関わり指導支援をしていけばよいのかをしっかりと理解できた。」これらの好評価及び当該科目の総合的満足点「4.85」から考察する。今後も、学生が模擬授業をする前の「学習指導要領」に基づいた教科の特性の全体指導を経て、個別の指導案作成指導徹底していきたい。これらの好評価及び当該科目の総合的満足点「4.42」から考察する。今後も、学生が模擬授業をする前の「学習指導要領」に基づいた教科の特性の全体指導を経て、個別の指導案作成指導徹底していきたい。⑥「できていない学生への対応の時間が長い。」の意見については、課外及びオフィスアワー並びにClassroomの確認指導を続けているが、さらに理解力・学力格差に応じた課外の時間確保が必要である。木2限これらの好評価及び当該科目の総合的満足点「4.75」から考察する。今後も、学生が模擬授業をする前の「学習指導要領」に基づいた教科の特性の全体指導を経て、個別の指導案作成指導徹底していきたい。
AL型の授業づくりの徹底は、教科指導法ではとりわけ求められる。今後も、継続して小学校教育実習前の一人一人が授業実践できる場を保障して「実践力」を高めていきたい。また、Googleスプレッドシートを活用して、模擬授業後に「よかった点」「改善点」の同時入力で質の高意見交換（主体的な対話）も継続していきたい。

「生活の理解」について述べる。履修57名の中54名（94%）が回答した「総合的な満足度4.44」についても、全体平均と比較して満足度が高かったと言える。意見の記述は以下の15点。①「生活についてより深く学べ、私が教師として教えていく立場になった時学んだことを参考にしたい」②「生活について深く知ることができた」③「課題の提出期限が長かった。」④「ちゃんとやれば評価される」⑤「授業内容が明白」⑥「模擬授業をしてみることで沢山学ぶことができた。」⑦「実際に教師の目線に立って発表する機会を全員に設けているのが1回生の段階ではすごく珍しかったので、とても良い授業づくりだと実感することができました。」⑧「一つ一つの範囲がわかりやすかった」⑨「学生たちが授業内容を発表したこと。」⑩「毎時間やることが明確でした。 また、事前課題をやることで授業の内容が掴みやすかったです。」⑪「 生活科の楽しさや大切さをこの授業と指導法を受けたことによって学ぶ事が出来ました。」⑫「分からない点など優しく教えてくださりありがとうございました。」⑬「発表の機会があったので成長することができたと思う。」⑭「説明が丁寧で分かりやすかった。」⑮「学問としての知識だけでなく、将来教師となったことを見据えてご指導してくださるので、大変勉強になる。」これらの好評価及び当該科目の総合的満足点「4.44」から考察する。」などの全て好評価の記述が見られた。多数の履修者に対応して、個別の意欲喚起と知識の習得を目的として、今年度も個に応じた指導や毎回のチーム5～7名ずつをグループ指導したこと、課外でもリハーサル及びメール指導を重ねたこともその満足度の要因の一つであると考えられる。成果を次年度に継続するためには、今後も1年次後期の意欲向上や自信のエビデンスとなる評価の場を保障していきたい。「動くおもちゃ製作」（エネルギー的な見方考え方の素地）のClassroom動画投稿やフィールド活動の自然体験シートは特に有効であると実感している。また、全教科で実践している「90分間の本時の指導計画案」をClassroomの投稿も継続していく。「学習指導要領」に基づいた教科の特性の全体指導を経て、グループ別の課題発表の指導を徹底

５．今後の目標

6.今後の目標

1) 短期的な目標

①学生の主体的な学びの支援、②実習における実践力の育成、③科目間の連携（学修内容を他の科目で実践、応用できる力の育成）

2) 中・長期的な目標

人間力に根ざして常に探求心を持ち、体験に基づいた豊かな感性と知識・技術を持った学生の養成

実践に関わる科目では、社会の変化に対応した学びのあり方を探り、学生自身が文化や自然の魅力を探求し、五感を張り巡らして物事を捉える体験をすることによって感性が揺り動かされ、表現力や実践力に繋げてほしいと考えている。実践を通した教授内容によって学生の興味を喚起し、魅力ある体験の場が提供できるよう努力を重ねていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

授業評価アンケート結果

2023年度　　授業評価アンケート(集計表)

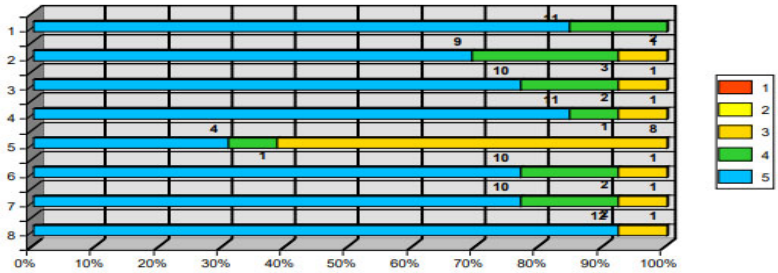
開講年度　2023年度　　木曜日2時限　　善野　八千子

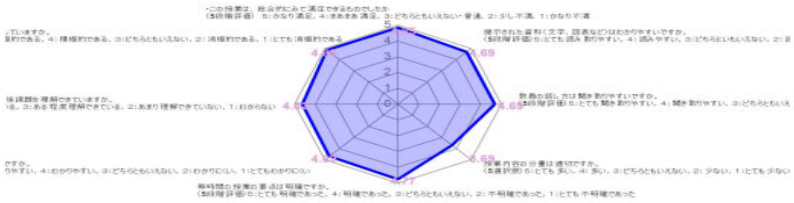
生活科指導法

アンケート総数　13 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	11	2	0	0	0	4.85
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	9	3	1	0	0	4.62
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	10	2	1	0	0	4.69
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	11	1	1	0	0	4.77
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	4	1	8	0	0	3.69
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	10	2	1	0	0	4.69
7．提示された資料(文字，図表など)はわかりやすいですか。	集計	10	2	1	0	0	4.69
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	12	0	1	0	0	4.85





2023年度　　授業評価アンケート(集計表)

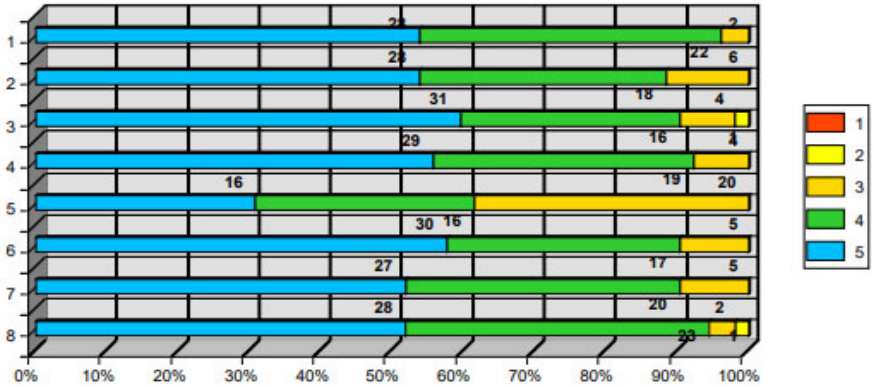
開講年度　2023年度　　火曜日3時限　　善野　八千子

生活の理解

アンケート総数　54 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	28	22	2	0	0	4.5
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	28	18	6	0	0	4.42
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	31	16	4	1	0	4.48
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	29	19	4	0	0	4.48
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	16	16	20	0	0	3.92
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	30	17	5	0	0	4.48
7．提示された資料（文字，図表など）はわかりやすいですか。	集計	27	20	5	0	0	4.42
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	28	23	2	1	0	4.44



ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	安東　雅訓

1．教育の責任

担当科目：代数学基礎, 代数学A, 代数学B, 代数学I, 代数学II, 応用数学（代数学）, 基礎ゼミナールI, 人間教育ゼミナールI, 人間教育ゼミナールII, 教育実践力開発演習I,
その他学習支援：数学道場（1年生週1回）, 数学検定団体受験の実施（年2回）

2．教育の理念・目的

数学の点数を取るためには, 問題の解き方を覚える方法が簡単です. 定義や定理の意味は分からなくても, 使い方を分かっていれば良く, 理解するとは定理の使い方が分かることを指すのだと思っている学生もいるでしょう.

しかし, 教える立場となるためには, 解き方を教えられる, では足りず, 「なぜ正しいのか」, 「なぜ間違っているのか」の疑問に答えられる必要があり, 数学におけるその答えは最終的には定義であり, 論理です. 定義に戻れる, 定義を読める学生を育てることを目的としています.

3．教育の方法

数学の演習問題においては, 全体に向けて解説と質疑応答をさせる他, 「問題の中で初めて定義される知らない計算」が出てくる問題も多く扱っています. また少人数だからできることとして, 自身で例を作成させるタイプの, 人によって答えが変わる問題も多く扱っています.

演習発表におおける質疑応答が学生間で上手く回るようにできれば一番良いのですが, それはなかなか難しいため, 基本的には私が「疑問に思うべきだと気付いていないであろう部分」に関して質問し, 気付きを促しています.

ゼミにおいては, ルールを理解しそれにアジャストすること, ルールを他人に説明すること, の2点ができない, あるいはその経験が足りていない学生が多くいると考えており, ゼミ活動にパズルやボードゲーム（毎回違ったものをゼミ生・教員が準備）を取り入れています.

4．教育の成果

昨年度は教員志望のゼミ生8名のうち, 6名が教採合格, 1名が私学合格という結果でした.

授業においては, 例に当てはめる, が通じない, あるいは当てはめるためにも定義を知らなければならない, ことが一部学生には伝わってきたように思いますが, そうでない学生の割合もまだ多いです.

5．今後の目標

定期試験において, 一般的な命題の証明を行う形の問題も, 単なる暗記にならないよう気を付けながら少しずつ取り入れていきたいです.

学生のゼミ発表が各回単発の内容になりがちなため, 継続的な内容を扱うゼミ生を増やしていきたいです.

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	岡野　聡子

1．教育の責任

1）担当授業科目（2024 年度）
・キャリア形成科目：キャリアデザイン、キャリアディベロップメント、キャリアスキルアップⅠ、キャリアスキルアップⅡ
インターンシップ
・教職科目：子どもと環境、子どもと環境の指導法、人間教育実践力開発演習Ⅰ
・ゼミ：人間教育学ゼミナール（基礎）、人間教育学ゼミナール（応用）
・その他：基礎ゼミナールⅠ、卒業研究、人間教育学（1 コマ）、保育表現力演習（2 コマ）
2）各種学生支援
・一般企業の就職支援（履歴書指導、面接対策指導、等）の実施
・幼稚園専修 4 年生を対象とした公立園面接指導の実施
・奈良学園大学ボランティアサークル顧問としての学生支援の実施

2．教育の理念・目的

1）自らの教育理念と目的
・自らの教育理念は、理論と実践の統合を意識した教育活動の推進である。
・キャリア形成科目における教育活動の目的は、職業観や勤労観の醸成に限らず、心理学・社会学・教育学・社会福祉学・経済学・政治学等からの知見を取り扱い、人生 100 年と呼ばれる時代をどのように生きるかについて個々人に考えさせることである。
・教職科目における教育活動の目的は、現場で保育活動ができるようになる実践力の開発である。
2）価値観・信念
・学生と教員の双方向的関係性に基づいた授業づくりを大切にしている。

3．教育の方法

1）学生との接し方
・学生の話は、最後までじっくりと聞く。聞いた後、観点を整理して問題を構造化し、具体的な解決策を提示する。
2）授業の工夫（授業の方法，内容等）
・キャリア形成科目では、アクティブラーニングを取り入れている。2 年生、3年生の後期には、社会変革をもたらすビジネスアイディアコンテスト等に応募させるなど、学生自身が考えたアイディアが社会でどの程度通用するか、学生自身が楽しみながら挑戦をする機会と環境の設定を行っている。
・教職科目では、実践力を養うために、保育理論、保育方法論といった基礎理論を学んだ後、保育教材の開発や指導計画の立案、保育実践をさせ、相互評価、自己省察から学びを深め、学びの定着を図っている。
3）FD/SD 活動等にかかわる内外の研修会への参加
・広陵町教育委員会・教育委員として、教育活動に関わる研修会に参加している。
・園内保育の講師として参加し、保育現場の実態を把握している。
4）自らの専門分野の成長
・日本保育学会、キャリア教育学会、日本地域福祉学会、日本教師学学会等に入会し、研究発表を行っている。

4．教育の成果

1）達成できたこと，できなかったこと（達成レベル）
・キャリア形成科目では、授業の振返りや授業評価アンケートを見ると「視野が広がった」「自分を見つめ直す機会となった」等の回答が多く、授業の主目的は概ね達成できていると思われる。達成できなかったこととしては、毎年のことであるが、レポート作成において、自己の考えと引用部分が明確でないものが多く、書き方の指導が必要である。教職科目（子どもと環境（1 年次後期））では、グループにて教材開発を行った。グループ活動では、各人に役割意識をもたせて参加をさせるため、フリーライダーはおらず、全員が教材開発の取り組みに関わったこを確認した。
2）授業アンケートの結果
・各項目について、おおむね学内の平均値を上回っている。

5．今後の目標

1）短期的目標 ・学生からの授業の振返り・質問を活かすなど、双方向的関係性に基づいた授業づくりを行う。 2）長期的目標 ・キャリア形成科目にて、教育効果測定（グループワークの成果、協同性尺度等）を行い、量的側面から学生の何の能力が向上したかを明らかにしたい。
・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
・シラバスについて：本学Ｗｅｂサイトに公開されているシラバスを参照のこと。 ・各種学生支援の内容：キャリアセンター運営委員の立場から、学生の一般企業の就職支援を行っている。 ・研修会や学会への参加状況：2023 年度は、日本地域福祉学会、日本生活科・総合的学習教育学会、日本人間教育学会にて学会発表を行った。 ・授業アンケートについて：本学Ｗｅｂサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	岡野　由美子

1．教育の責任

・担当授業科目

知的障害者の心理、障害の検査と評価、知的障害者の教育課程論と指導論、発達障害教育総論、視覚障害教育総論、特別支援学校教育実習（事前事後指導）

特別支援、特別支援A（初等）、特別支援B（中等）、現代教育課題A（不登校・いじめ）

人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）、

卒業研究

・各種学修支援

本学は教員を目指す学生が多く、教員採用試験に向けた面接練習、模擬授業練習等、オフィスアワーには個々への指導を実施する。中でも特別支援学校教員を目指す学生にはその専門分野の個別指導を行う。その他学生の就職に関する相談や情報提供は丁寧に行なっていく。

2．教育の理念・目的

1)教職を目指す学生の育成を目的とする。様々な教育課題を知り、それに主体的に取り組む実践的な力を育む。

2)すべての教育現場で実施される特別な支援を要する児童生徒への指導、支援についての知識をつけ、その多様性に対応する力をつけさせる。まずは自分自身を理解すること、そして独りよがりにならず、自他の違いを認め、お互いを尊重するということを日々の教育活動全般を通じて学生に伝えていく。

主に上記の２点を重視している。

3．教育の方法

＜学生との接し方＞

学生が自己理解を進め、卒業後の進路に向かい目標をもち主体的に学修を進めていくために、まずは学生の話を傾聴し、状況を把握して指導支援にあたることが重要であると考える。大学が最後の教育を受ける機会である学生も多く、卒業後は自立し社会人となっていく。自ら、自分の個性と向き合い、何が得意か、何を目指しているのかを見つめること、そして、様々な課題に自力で向かうと同時に周囲の力を借りること、それによってより良い結果が得られるということに気づかせるような支援を丁寧に行う。学生の話を傾聴しながら自己を振り返らせる作業を通して自覚的に気づかせていく。

＜授業の工夫＞

方法が分からない、取り組む道筋を具体的に描けず成績が伸びない、力がつかない等のことがないように、すべての授業において、評価のポイントを示すなど細かな指導、支援に取り組んでいる。

さまざまな教育課題に立ち向かい、対処していく教員を育成する立場として、主体的・対話的な学び、ディスカッション等さまざまな形態の授業を構築し、自ら学ぶ意欲を高め、他者と連携する力をつけさせる。

特別な支援を要する幼児児童生徒への対応は、学校現場では喫緊の課題である。その理論や実際の支援についての理解に重点を置き、勤務先で応用できるような実践力の育成に努めている。

毎授業ごとのリフレクションを行い、疑問点への回答、学修の振り返りに対するコメントなどを個別に返しつつ、全体への共有も適宜行うなど、理解の深まりと広がりを意識した授業展開を行う。

＜FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加＞

学内研修会への参加、研修で得た情報を取り入れた授業の構築を行っている。

＜自らの専門分野における成長＞

特別支援教育に関する学会等への参加、日本LD学会では広報委員会副委員長を務め、最新情報や取り組みについて取材、啓発活動にも貢献している。これらの取組から得た知識や情報は授業に反映するようにしている。また、県内外の特別支援教育に関連する研究会講師の依頼も多く受けており、現場のニーズに適した内容を展開するとともに、自己の専門的知識のブラッシュアップも行うよう取り組んでいる。

4．教育の成果

各授業における提出課題、リフレクションにおいて、ポイントを整理して書くことができるような力をつけてきている。双方向の授業を心がけており、リフレクションにおける感想や質問についてのフィードバックは次週の授業時に必ず行なっている。

ゼミ生以外の学生も、自ら、進んで質問をしてきたり研究室を訪ねてくるケースも増え、信頼関係を築くことができていると考えている。2023年度の前期授業評価については学生の総合的な満足度は「現代教育課題A（不登校・いじめ）」では4.48であった。コメントでは、前期の授業でこれが一番面白く興味を持って参加した、などの感想が挙げられており、概ね主体的に学ぶことができるような授業展開は提供できたものと考える。授業の事前に予習課題を与えるなど、当日の授業に主体的に取り組めるような工夫を行ったが、授業評価では、授業アンケートでは授業時間外での学習を行なっていたかという項目の評価が他の項目に比べ若干低い数値となっている。今後は、事前学習とともに事後の学習についてもどのような取り組みをすればよいかなど具体的な方法や内容についても指導支援を行なっていく。

5．今後の目標

今年度は特別支援学校教育実習が始まって2年目となる。特別支援学校の教育実習に関し、学生が不安なく開始できるよう、指導案の作成や模擬授業、特別支援学校の様子などを授業で扱い、１０日間を有意義なものにできるように取り組んでいく。
特別支援教育は、すべての教育機関で実施される大切な教育である。それぞれの障害について、正しく理解し、学ぶことが、将来の教育現場で生きて働く力となることを踏まえ、わかりやすい授業を実施する。また、学生相互に意見を交流したり、自ら調べたりする中で、新たな疑問をもったり、それについて調べたり学んだりすることができるよう、具体的な方法を示すなど、学ぶための方略を身につけることができるような授業を実施したい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・シラバス及び授業アンケートは本学HPに公開されている。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	岡本恵太

1．教育の責任

・国語科指導法
・教育社会学A（初等）
・教育社会学B（中等）
・社会学
・人間教育実践力開発演習Ⅳ（複数担，主担当）
・言葉の理解
・教職実践演習（複数担）
・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）
・人間教育学ゼミナールⅡ（応用）
・卒業研究
・教育実習Ⅰ
・教育実習Ⅱ
・進路相談
・履修相談

2．教育の理念・目的

教師に必要な資質・能力としてのコミュニケーション力、企画力、行動力、課題解決力などの人間力を培うことを目標としている。そのために、次の３点を特に重視する。
①現場での実践を想定し、具体的な方法や筋道を提示する。
②実践に生きる形で、理論や考え方を提示する。
③学生の問題意識に応じたを支援する。

3．教育の方法

（1）学生との接し方
　普段から、学生とのコミュニケーションの機会を多くとるようこころがける。生活や学習上の悩みを聞き取り、共に方向性を見出す。特にゼミにおいては、普段から学生の問題意識等を聴き取り、学習の支援に生かしていく。
（2）授業の工夫
　授業で提示するスライドを工夫し、考え方の筋道を目で見てわかるようにして理解を支援する。また、各授業で実践的な課題を提示し、教科の学習内容がが実践にどう生きるかを示す。論文やレポート等の指導にあたっては、できるかぎり個別指導の場を設定する。また、小テスト・小レポートなどを授業に組み込み、学生の理解度を常にチェックしながら授業を進めていく。
（例）「言葉の理解」方言・流行語など身近な言葉の問題に目を向けて、調べたり話し合ったりする活動を取り入れる。また、問題演習も取り入れて、理解の定着を図る。
（４）学生のニーズに応じた進路指導
学生のニーズや課題を聴き取り、一人一人が自信を持って面接等に取り組めるよう働きかける。

4．教育の成果

2023年度においては、教員の熱意やプレゼンテーション等資料の分かりやすさについては、おおむね効果があったと考える。また、小テストを取り入れた授業も、理解度等において一定の効果があった。一方、授業時間外の学習などを促すことには課題があった。また、さらに対話の時間を増やすなどの工夫が必要である。

5．今後の目標

１）アクティブラーニングを意識し、主体的な学習を促すこと。
・授業の中において、教育実践に直結する課題について議論する場を設定する。
・ICT機器（ロイロノート）の活用を試みる。
２）学生一人のニーズに応じた、進路指導やゼミにおける個人研究支援，卒論指導を実施する。
・ゼミ３回生の研究に関する問題意識の喚起と、追求の支援。及び、4回生の研究の教育実践的な意義を明確にさせていくこと。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

2023年教育社会学アンケート結果
2024年国語科指導法シラバス

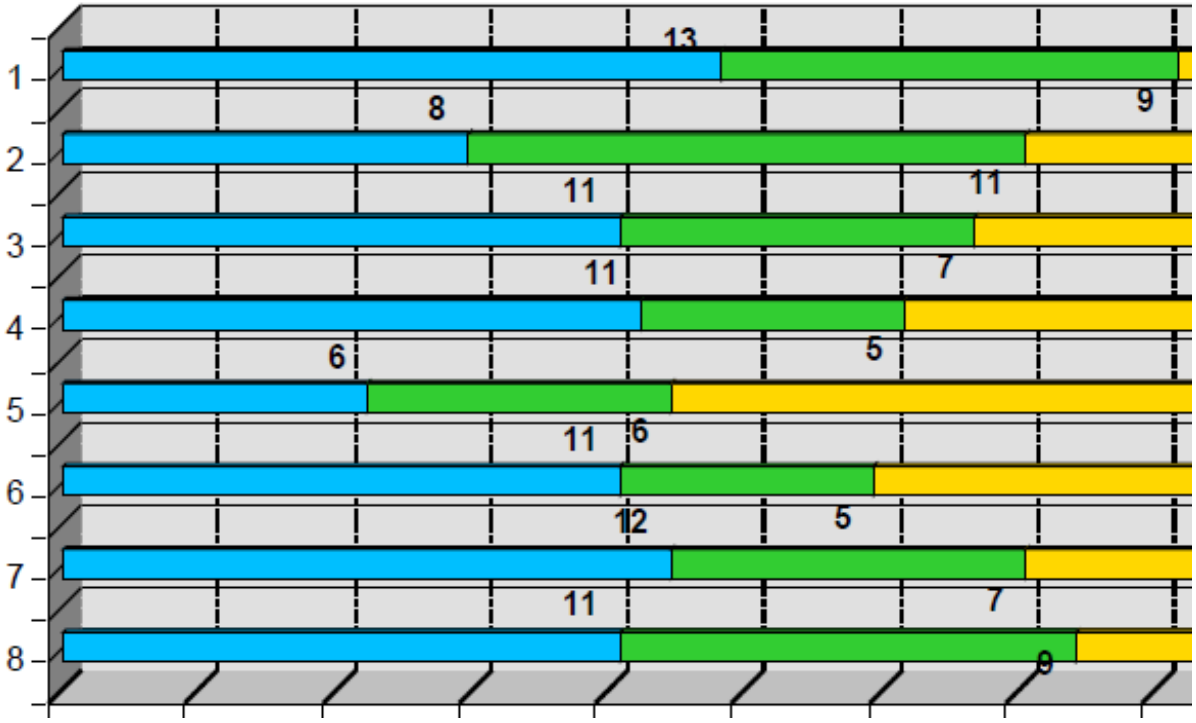
開講年度　　2023年度　　月曜日３時限　　岡本　恵太

教育社会学

アンケート総数　　27 枚

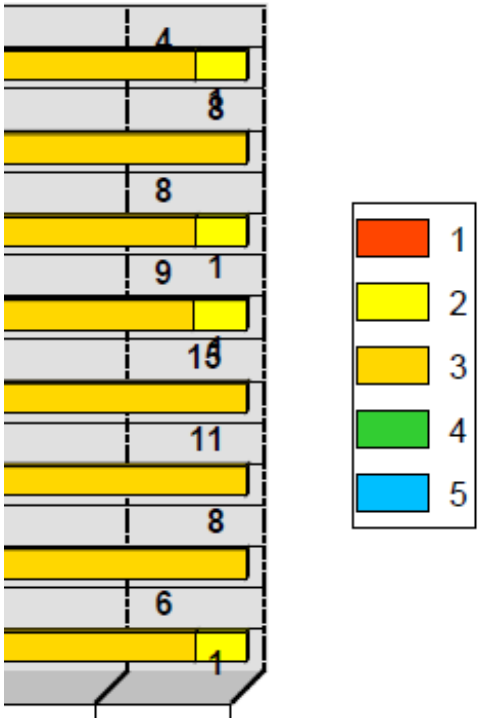
5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2

	評価	5
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	13
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	8
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	11
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	11
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	6
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	11
7．提示された資料（文字，図表など）はわかりやすいですか。	集計	12
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	11



	1:1

4	3	2	1	平均
9	4	1	0	4.26
11	8	0	0	4
7	8	1	0	4.04
5	9	1	0	4
6	15	0	0	3.67
5	11	0	0	4
7	8	0	0	4.15
9	6	1	0	4.11



国語科指導法シラバス

前期　3　2　選択　担当教員　岡本　恵太

月・1

【授業の目標・概要】

まず、学習指導要領の解説や実践研究の授業の視聴により「言葉による見方・考え方」の育成や「主体的・対話的で深い学び」をめざした国語科の授業についての理解を行う。次に、グループで学習指導案を作成しそれに基づいた模擬授業を行うことにより実践力を身に付ける。さらに、授業後は質疑応答と指導助言の時間を設け工夫されていた点や改善点などについて全体で討議し、それを参考にした改善指導案を作成する。

【学習の到達目標】

主体的・対話的で深い学びに向けた国語科指導の実現のため「国語科教育の意義と役割、目標と内容、学習指導計画、指導方法と評価の基本」等について理解する。さらに「言葉による見方・考え方」を育成するための教材研究や言語活動例を効果的に取り入れた指導法についての理解を深める。

【授業方法・形式】

1．学習指導要領と関連して各章毎の内容を要約していく。

2．具体的指導について小学校教材や参考図書を参照し，実践的に調べる。

3．教育課題に広く学んでいく。

【授業計画】

〇第1回国語科教育の目標と内容

　学習指導要領の総則及び「言葉による見方・考え方」を核とする国語科の目標、内容に関する学習指導要領のポイントについて

〇第2回学習指導要領に基づく「言葉による見方・考え方」を育成する学習指導計画

　〔知識及び技能〕〔思考力，判断力，表現力等〕の二つの枠組みで整理されている「内容」をふまえた学習指導計画の作成上の留意事項や単元指導計画、学習指導案の作成について

〇第3回「主体的・対話的で深い学び」の実現による国語科に求められている指導の改善・充実

実践研究に基づく授業のDVD視聴による、学習内容の改善・充実をふまえた授業展開の概要と指導者が果たすべき役割の理解

〇第4回国語科の指導と評価

国語科指導における学習過程に即した評価のあり方について

〇第5回国語科に求められている指導の改善・充実のための教材研究(1)

「語彙指導の充実」「情報の扱い方に関する事項の新設」「考えの形成・深化の重視」「ICTの効果的な活用」等をふまえた教材分析について

〇第6回国語科に求められている指導の改善・充実のための教材研究(2)

「読書指導や学校図書館活用の重視」「我が国の言語文化の理解」「外国語科をはじめとする他教科との関連の重視」「障害のある児童・生徒などに対する指導内容や指導方法の工夫」「ICTの効果的な活用」等をふまえた教材分析について

〇第7回〔思考力，判断力，表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(1)

「A　話すこと・聞くこと」における指導法とその留意点について

〇第8回〔思考力，判断力，表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(2)

〇第9回〔思考力，判断力，表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(3)　　「C　読むこと」における指導法とその留意点について

〇第10回〔知識及び技能〕に位置づけられた「書写」に関する指導とその留意点

書写として行う硬筆･毛筆の指導のあり方、「点画の書き方」「書く速さ」等をふまえた指導の工夫等について

〇第11回模擬授業演習(1)

「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「A　話すこと・聞くこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究

〇第12回模擬授業演習(2)

「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「B　書くこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究

〇第 13 回模擬授業演習(3)

「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「C　読むこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究

〇第 14 回模擬授業演習(4)

「情報の扱い方」「読書指導」「書写」「ICT の効果的な活用」等における指導の工夫に焦点をあてて追究

〇第 15 回「言葉による見方・考え方」「主体的・対話的で深い学び」に向けた国語指導についてのまとめ

　「言葉による見方・考え方」の育成をめざす観点からの振り返り

【成績評価の基準 】

毎回の小レポート(40%)、指導案作成・模擬授業(30%)、期末レポート(30%)

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の小レポートについて、コメントをつけるかまたは、次回の授業で取り上げてコメントする。

【準備学習・復習及び授業時間外の課題】

（準備学修）「小学校学習指導要領解説」「国語編」（平成 29 年告示）から、授業内容に関連した所を読む。また、授業と関連する国語の教材を読み、予備知識を増やす…20 時間

（授業時間外の課題）　提示したテーマや課題に沿って実践事例等を収集し、課題レポートにまとめる…20 時間

（復習）授業での学修内容について理解度を確認し、課題レポートや学習指導案としてまとめる。授業中に実施した模擬授業についてこれまでの学習をもとにふりかえり、リフレクションレポートを書く。…20 時間

【履修上のアドバイス及び留意点】

資料の予備配布は行わないため、欠席した学生は、次回講義までに各自対応しておく。

【教材・教科書】

文部科学省「小学校学習指導要領」、「小学校学習指導要領解説」「国語編」（平成 29 年告示）

【参考書】

必要なときに、随時連絡する。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	鍵本　有理

1．教育の責任

担当授業科目
- ・国語学入門
- ・国語学Ⅰ
- ・国語学Ⅱ
- ・国語学特論
- ・基礎ゼミナールⅡ
- ・教職表現力演習
- ・国語表現力演習
- ・人間教育実践力開発演習Ⅲ☒
- ・語学・文学総合演習Ⅰ（国語学）
- ・日本語Ⅱ
- ・人間教育学ゼミナール（基礎）

各種学生支援
- ・「学生」としてのスキル指導（スケジュール管理やファイリングの手法、大学教育としてのアカデミックスキル）
- ・（専門分野と関連した指導）参考図書検索方法や引用の仕方、文章の書き方・研究指導（基礎ゼミナールⅡでは図書館と協力）
- ・その他学生相談

2．教育の理念・目的

大衆化した大学において、今こそ大学での学びとは何か、考える必要がある。研究者志望ではない学生にとっても、大学における本来の学問に触れる経験は有意義であり、高校とは違って、自ら考え、動くことを身につけさせ、豊かな人間性を育みたい。

特に、専門の国語学（日本語学）という学問を通じて、何事にも興味を持ち調べる能力を養い、場合によっては定説・通説をも疑うこともできる学生が育てられれば本望であると考えている。

3．教育の方法

教員の研究内容とこれまでの高等専門学校における教育経験（担任・教務や学生等各種委員会・国語科教育・学生相談室・図書委員会指導・学科主任等）を生かし、

・学生に対しては、「生徒」から「学生」へのステップを意識した接し方をする（自ら動く・情報管理能力を身につける）

・授業では身近にある用例を多く紹介することで言葉の面白さに気づき、調べられる力を涵養、複数の文献を参照しレジュメを作成、発表することで何が正しいかを考える、現代の「メディアリテラシー」にも通じる教育を行う

・学内におけるFD/SD活動はもちろん、各種研究会等にも参加し、教育現場の情報収集にも当たっている

・大学の講義を通して、自らの国語学（日本語学）の知識を見直し、研究にも役立てる

・古典文学の知識についても折に触れ講義し、学生が教育現場で生徒の興味を引く教材を作成できるようにする

4．教育の成果

・着任2年目となり、講義に使用する資料や各種課題プリントの改善ができ、学生からも一定の評価が得られた（授業アンケート自由記述）

・特にゼミナール指導については、昨年度初めて担当し、テーマ選定や研究方法の指導に戸惑ったが、今年度は高等学校の「探究学習」教材を参考にし、本学図書館の協力も得ることとした。その結果、学年末のプロジェクト発表や、ゼミレポートについてはかなりレベルの高いものができあがったと考える（例：3年ゼミレポートはそれそれ3000字以上作成、形式・参考文献一覧も整ったものが提出された）

（少人数の授業が多く、そのような大学の制度により自らの力不足を補えた感がある）

・昨年度は授業準備期間も十分になかったが、今年度は特に「演習」の目的を達するために課題・説明プリントを工夫した。その結果、授業アンケートにおいても、「2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。」の項で、昨年度はやや低い値だったが、今年度は全体平均をやや上回る値になっており、改善できたと考えられる。

5．今後の目標

授業アンケートから、やはり準備時間不足の場合に「板書」や「話し方」の項での改善が必要だと感じた。この点、来年度は改善できると考えている。

着任後2年間は、専門ではない科目も含め、担当講義が多かったため、来年度からは研究環境を整え、中断していた専門分野の研究を進める。その成果は講義やゼミ指導にも還元することとする。

専門知識を生かし、学生が指導書に頼らない教材研究・開発ができるよう、まずは学生自身に必要な文学･語学の知識を身につけさせ、必要な文献についても引き続き紹介することを目標とする。

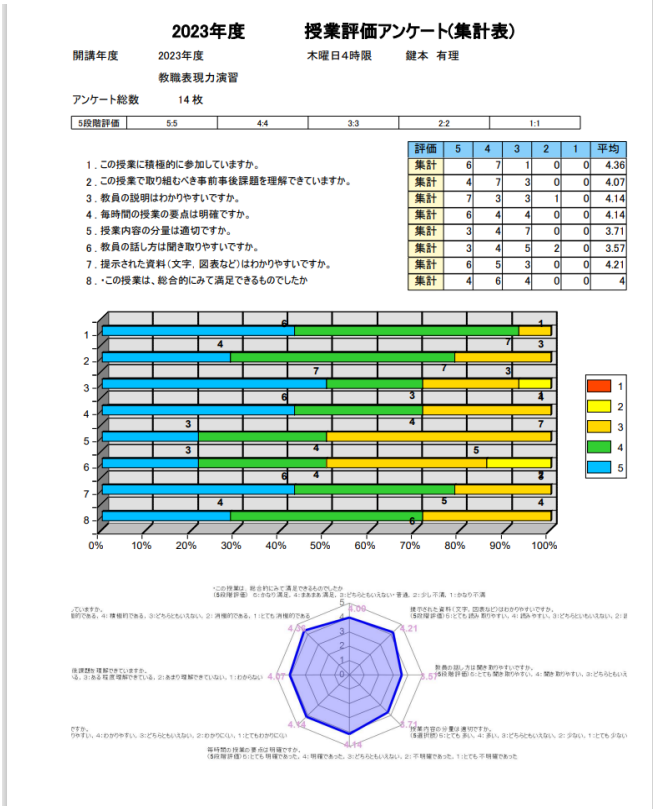
長期的には、一時中断していた語法の研究を再開し、10年後には成果を出せるようにする。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・担当科目のシラバスを参照されたい。

・学内各種研修会のほか、文化庁の国語問題研究協議会・古典教材開発研究センター研究集会や萬葉学会・萬葉語学文学研究会・国語語彙史研究会・関西大学国文学会等に参加。

【授業アンケート結果】



2023年度　授業評価アンケート(集計表)

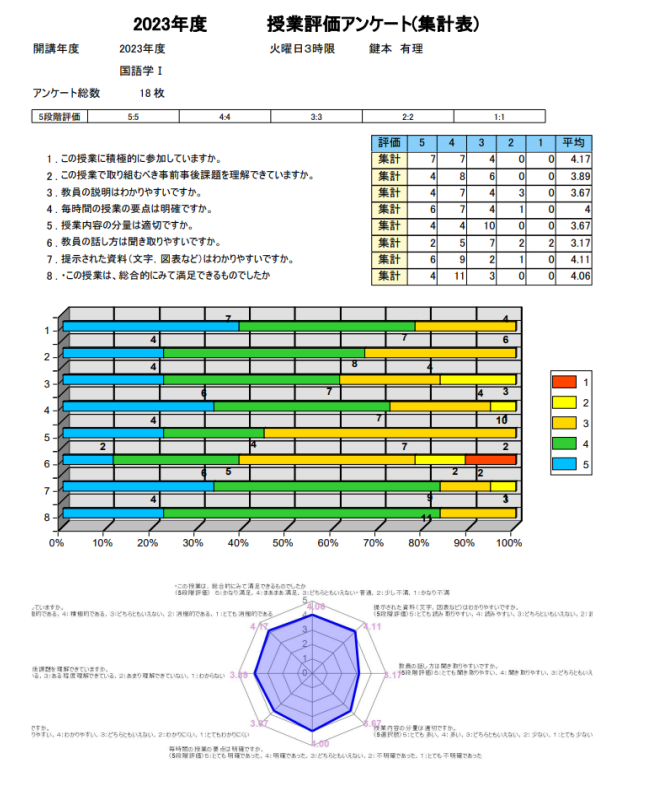
開講年度　2023年度　木曜日4時限　鍵本　有理

教職表現力演習

アンケート総数　14 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	6	7	1	0	0	4.36
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	4	7	3	0	0	4.07
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	7	3	3	1	0	4.14
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	6	4	4	0	0	4.14
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	3	4	7	0	0	3.71
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	3	4	5	2	0	3.57
7．提示された資料(文字，図表など)はわかりやすいですか。	集計	6	5	3	0	0	4.21
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	4	6	4	0	0	4



2023年度　授業評価アンケート(集計表)

開講年度　2023年度　火曜日3時限　鍵本　有理

国語学Ⅰ

アンケート総数　18 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	7	7	4	0	0	4.17
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	4	8	6	0	0	3.89
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	4	7	4	3	0	3.67
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	6	7	4	1	0	4
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	4	4	10	0	0	3.67
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	2	5	7	2	2	3.17
7．提示された資料(文字，図表など)はわかりやすいですか。	集計	6	9	2	1	0	4.11
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	4	11	3	0	0	4.06

（自由記述）　「分からないとプリントに書くと、丁寧に教えてくださるところがよかった。」「授業の進行度合がすごくいい」「黒板をもう少し脈絡と流れのわかるようにして欲しい」など。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	川端咲子

1．教育の責任

主に、国文学に関連する授業を担当。国文学関連では文学史を中心に授業を行う。教職表現力演習に関しては、学生の基礎学力向上のため特に「読む・書く・発言する」ための取り組みを行う。開発演習Ⅳでは小論文指導を行う。

・基礎ゼミナール（通年）
・教職表現力演習・国語表現現力演習（オムニバス　半期分担当）
・人間教育実践力開発演習Ⅳ（通年）
・国文学入門（前期）
・国文学Ⅰ（後期）国文学Ⅱ（前期）
・国文学特論（前期）
・文学（前期）
・語学・文学総合演習Ⅱ（後期）（通年）

2．教育の理念・目的

幅広い視野を持つ人間として社会に出る学生を育てることが教育目的である。そのためには、大学の４年間で広く深い知識を獲得し、獲得した知識をもとに様々な事象の中から問題点を発見し、自ら探求する力を身につける事が重要であると考えている。
近年アクティブラーニングの重要性は教育の場における当然のこととなっている。この点について全く意義はない。ただし、しっかりとした知識のインプットがあってこそのアウトプットであるというのが私の価値観であり信念である。

3．教育の方法

（授業の方法）日本文学は古典文学、近代文学、現代文学と区分される。中学高校の教材として扱われるのは圧倒的に近代・現代文学が多いが、授業で取り扱うのは古典文学を中心としている。理由としては以下のことが挙げられる。①自身の専門が古典文学であること。②近代・現代文学に比べて、古典文学の世界を知るためにはより多くの手助けが必要であること。③文学の歴史という点では古典文学の時代は近代・現代文学の時代を遙かに上回る長い期間であること。④高校までの教育を考えた場合、古典文学の方が未知の世界が広がっていること。
一例として、「国文学Ⅰ」では、連歌・俳諧・俳句の成立と展開を説明する講義を行った上で、それぞれの作品を鑑賞するという授業を行った。連歌・俳諧という高校までの国語では触れないであろう文学ジャンルをあえて取り上げ、古代から近代までの展開を伝えることで、日本文学の奥行きの深さを理解して欲しいという意図による。また、高校までに必ず授業で取り上げられる俳句が連歌・俳諧を踏まえていかにして誕生したのかを説明した。古典文学が単に古いものなのではなく、現代の文学に繋がるものであるということを、しっかりと伝えることができたのではないかと考える。「国文学Ⅱ」では学生に古典の作品を一つ選んで紹介させる授業を行った。紹介するためには理解しなければならない。それぞれ担当した作品について調べることで、新たな知見を得られたのではないか。
（内外の研修会）特になし

4．教育の成果

学生にとっては未知のジャンルを紹介することで、自分たちが知っている古典文学がすべてではないことは理解できたと思う。またいくつかの作品に対しては現代の人間の思考と似たことがあることに気づいた学生も少なからずいた（授業後の課題での記述より）。ただし、インプットを重視しすぎたためにアウトプットがほとんどできなかったことは大きな問題点であった。
また、人間教育実践力開発演習Ⅳの授業中ならびに課外に論文指導を行ったが、ほとんど書く訓練を続けてきていない学生に対して、有効な指導方法を模索する必要があることを実感した。その中で、2023年度は、「教職表現力演習」（通年）で「書く力」の育成に特化した授業を人間教育学科1年生全員に対して国語専修教員で担当した。この成果がどうでるかを見極めて、引き続き「書く力」獲得のための方法を模索していきたい。

5．今後の目標

昨年度同様、国文学の授業すべてにおいて、知識の獲得と問題点の発見力・探求力の獲得を両立させる方法を探っていくことが今後の課題である。しかし国語の教員を志望する学生に対して、「国文学」の知識を与えなおかつ発見力・探究心の獲得をさせるには、授業時間が少なすぎるのが現状である。3年生以上には「国文学」そのものの授業はほとんどない。２年間の授業をいかに有効に進めていけるのかは今後の課題といえる。「人間力」を高めるという学科の学習理念に対して日本文学、特に古典文学をどのように活用していくのかを考えていきたい。教員を養成する大学の教員としても、近世文学研究者としても「なぜ古典を学ぶのか」という問いに対して古典を学ぶことの必要性を主張できるような授業を考えていかなければならない。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・「教職表現力演習」2023年度シラバス
・「国文学Ⅰ」2023年度後期シラバス
・「国文学Ⅱ」2023年度前期シラバス
・教員採用試験のための小論文指導を時間外に実施。
・2023年6月10日・11日、11月5日・6日　日本近世文学会参加
・同志社大学古典教材研究センター主催の研究集会（年2回）に参加

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	高橋　千香子

1．教育の責任

主として保育士資格および幼稚園教諭免許取得にかかわる科目を担当している。臨床心理士として家庭児童相談に従事していた経験を生かし、子どもの心理発達、保育相談、子育て支援などを学ぶ科目を担当している。令和5年度に単独で担当した専門科目は「幼児教育相談支援」、「子ども家庭支援の心理学」、「子育て支援」、および保健医療学部リハビリテーション学科の専門科目の「臨床心理」である。この他、専門演習科目である「教育実践演習（幼）」、本学独自に設定されている演習科目の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」は、本学就任以降毎年担当しており、保育者として必要な知識や思考力、学校支援ボランティアを通した対応力、総合力としての保育実践力を育成している。

令和5年度は、1年次生対象の「基礎ゼミナールⅠ」を担当し、乳幼児教育専修の1年次生11名の担任をするとともに、本科目の主担当として、大学生としての心得やアカデミックスキルの習得、基礎学力向上の取り組み等の内容を、他の専修の担当教員と協働して実施した。

学生支援では、臨床心理士および公認心理師有資格者として、令和3年度まで本学の学生相談室カウンセラーを担当していた。主な対象は保健医療学部の学生であったが、必要に応じて人間教育学部の学生の相談にも応じ、青年期の心の問題に対して常に高い関心を持っている。

2．教育の理念・目的

まず、本学の教育理念にある「誠実で協調性のある、心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材」を育成したいと考えている。具体的には、一人一人の子どもや保護者と専門家として誠実に向き合い、さまざまな体験の中で喜びだけでなく苦しみにも共感し、発達促進的に関わり、共に成長していける保育者を養成したい。また、良い時も悪い時も自らの状況を受け止められる心の柔軟性をもった人になってほしいと考える。そのために、生涯を通して、変化を怖れず、学び続けることのできる人材を育成したいと考えている。

3．教育の方法

学生とはつねに誠実に向き合い、学生の話を良く聞くことを心がけている。授業では教授内容が学生にきちんと伝わっているか、学生の視点を持ちながらすすめるようにしている。学生に伝わる言葉を考え、質問に対しては丁寧に応答するとともに、学生自らが考え、答えを導き出すことができるよう心がけている。パワーポイントや資料についても、見やすさを考えて作成している。

授業における工夫としては、「幼児教育相談支援」「子育て支援」では、教育相談や子育て相談、児童虐待の場面等の事例をもとに、保育者として適切な理解と関わりのあり方について全員で考える事例学習を重視している。まず、自分がその立場だったらどのように感じ、考えて行動するかを各自で考え、文章にした後、隣同士やグループでディスカッションし、最後に全体に向けて発表する。この方法により、他者の多様な考えを知り、自らの考えと照らし合わせることで、保育者としての思考力や対応力を高めることができると考えている。カウンセリングの基礎的技術を学ぶ単元では、ペアまたは３人一組になり、ロールプレイを通して「相談者」「保育者」「観察者」を体験し、振り返ることを通してメタ認知を賦活させ、自己理解を深めるとともに実践力につながるよう工夫している。このように、授業では思考することや対話を通した学びを重視している。

また、臨床心理士・公認心理師として自らのスキルの維持向上に努めるため、大学教員の傍ら子ども家庭相談の臨床実践を継続している。学会やセミナー、複数の定期的な研究会や勉強会に参加し、自ら学び続けることを実践している。大学内で実施されるFD/SD研修会にも積極的に参加している。

4．教育の成果

授業評価アンケート（5点満点）は、2023年度、「幼児教育相談支援」「子育て支援」「子ども家庭の心理学」については受講者数10名以下のため実施対象外であった。よってアンケートによる評価は得られなかったが、これらの授業では少人数の良さを活かし、対話を十分に取り入れたり、提出物をより丁寧に確認し、毎回コメントを記入して返却したりすることにより、学生の学修の理解度は深まったのではないかと考えている。

「臨床心理」では、回答者は34名、総合的満足度は4.21であり、全体平均の4.08よりも上回っていた。自由記述には「聞きやすかった」「実際の検査票を見せてくれたり、動画があったのでわかりやすかった」「質問などを講義の最初に全体で教えてくださる」「資料に書き写すのが主なので、欠席したときのためにも資料をクラスルームでアップしてほしい」などの意見があった。以上により教育方法についてはほぼ達成できたと考えているが、自由記述における最後の意見については次年度に改善したい。

5．今後の目標

短期的目標は、事例学習において、テキストや資料に掲載された事例だけでなく、昨今の保育現場でよく出会う、時代の変化に即した事例をより多くリサーチし、学生に提示したいと考えている。また、私自身の臨床経験について、どのように話せば学生の心に伝わるか、教員としての表現力を高めていきたいと思う。

長期的目標としては、保育現場の求める保育者の資質や能力、およびそれらの養成方法を研究し、授業内容や学生支援に生かしていきたいと考えている。また、臨床心理学的援助の実践や研究を通して、保育者を目指している学生のみならず、リハビリテーションを学ぶ学生にも役立つ授業や学生支援を行っていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・シラバス、授業評価アンケート　（本学HP公開中のため添付省略）

・学会、セミナー、研究会、勉強会への参加状況・・・令和5年度は、学会への参加は2回、オンラインによるセミナー（通年で10回）、継続研究会（通年10回）、その中で事例検討における事例提供2回、その他各種研修会に複数参加。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	冨山敦史

1．教育の責任

〇学生に対して何を行っているか

「学びに困難を抱える児童生徒が、学ぶ喜びを喚起できる授業や支援の開発・創造」をテーマに教育・研究活動を行っています。

学生の学修には、

①国語科の授業を児童生徒にとって魅力あるものにすること、

②学びに困難を抱える児童生徒に対する具体的な支援ができること、

③これらの実現のために、時間をかけてじっくりと文献読解や調査、研究に持続的に取り組むことのできる資質、能力を自ら育てていくこと

を求めていきます。その前提として、私の授業においては、学生個々の特性に応じた学び方を重視したアプローチの構築に日々努力しています。

〇担当授業科目

・国語科教育法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

・基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ

・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）

・人間教育実践力開発演習Ⅰ・Ⅱ

・教育実習事前事後指導（中・高）

・教職表現力演習

・教職実践演習（中・高）

・教育実習Ⅰ・Ⅱ（中・高）

〇各種学生支援

・2023年入学生アドバイザー

・学友会のメンバーに対するアドバイスや支援の実施（ボランティア）

・ICTやSNSを使用した進路相談活動（教採対策指導・公務員、企業への就活指導）の実施

2．教育の理念・目的

〇どのような理念･目的等に基づいて行っているか

私の専門分野は、幼保から高校の教育臨床を根幹に、30年に亘る中学校教員の実践に基づく生徒の実態を踏まえた「国語科教育学」の構築、大学生の時からライフワークとして継続研究している「中国古典文学」（人としてどう生きるべきか、生き方を探究すること）、学校現場等における「読み書きに困難を抱える児童生徒への支援（ICT支援含む）」の３つを柱にしています。上記の専門分野を根幹に据えて、教育を学んでいる学生諸君には以下の理念と目的をもって教育を進めていきたいと考えています。

・自らの教育理念と目的

教員の仕事とは、「子どもたちの自己肯定感を高める毎日の授業の提供と子どもたち個々との具体的な関わり」と「子どもたちがしあわせな未来を築いていくための可能性の追究」だと私は考えます。教員として一番大切なことは、「目の前の子どもたち一人ひとりを個人として、まるごと尊敬できること」であると考えています。すなわち、困難を抱えている目の前の子どもたちに、そのニーズに合った「学びの環境」をいかに提供するかが教員に与えられた使命だといえます。このような教員に成長していく前提条件としては、「子どもの目線に立てる」教員から具体的に「子どもに寄り添える」教員になること、真の「他者理解」が求められます。このことは「他者を理解できる力量が自分にはあるのだろうか」という問いを自分自身に突きつけるものであり、「自分が何者であるのか」という「自己理解」を自分自身に求めてくるもの、また同時に「他者理解」の限界をも認識できていることが必須だと考えます。「子ども理解」へのアプローチは、まず「自己を語ること」、そして「他者を語ること」が、最終的には自己を理解すること、目の前の他者を理解すること、「子ども理解」へと繋がっていく（ナラティブ・アプローチモデル）ことを認識できることだと考えています。

以上を踏まえて、常に「教育という営みにできることは何か」という問いを常に自身に問い続けられる教員（己の無力さや教育の力の限界を知るも希望を信じることをあきらめない）を共に目指していこうと考えています。そして、生徒も教員も共に自分の弱点をさらけ出しても、認め、認められる教育（ケアし、ケアされる教育、ありのままの「私」・「あなた」をまるごと受け止め合うこと）を学生諸君と共に創り出していきたいと願っています。

・価値観･信念

「教職」は、多様な背景や課題をもつ子どもたちが、それぞれの個性を活かして自立し、社会で他者と共に幸せに生きていく力を育む「対人援助職」です。様々な教育課題に対応できる最新の施設環境が整う本学で、お互いの課題を受け止め合える学友や親和的な教員たちと共に学生諸君の「教職」の夢を実現させたいと考えます。そのための前提として、学生諸君には、本学の最新の教育設備環境を活かし、一人一人の子どもの実態を踏まえた具体的な子ども理解、指導・支援、評価等を学び、「なぜそうなのか」という本質的な「問い」をもつことを大切にして、「どの子も取り残さない」「子ども第一」の教育を実現するために学修を深めて欲しいと考えます。まずは失敗を恐れずチャレンジすることを、私の全身全霊を傾けて応援します。この項の最後に、私の教育理念をあらわす言葉を中国の古典から引用して示します。

①『論語』子曰、不曰如之何如之何者、吾未如之何也已矣。【衛霊公第十五】

②『論語』子曰、不憤不啓、不悱不発、挙一隅不以三隅反。則不復也【述而第七８】

③『論語』子曰、知之者不如好之者。好之者不如楽之者。【雍也第六18】

④『荘子』知魚樂。【外篇秋水第十七】

３．教育の方法

〇どのような方法で２の実現を図ろうとしているか
・学生との接し方
合理的配慮の実現を含む学生個々の特性に応じた学び方を重視したアプローチの構築に努めています。
・授業の工夫（授業の方法，内容等）
どの授業においても学生の実態を踏まえ、学生の興味関心を喚起する課題の提供および学修事項の基礎基本となるものを知識理解に止めず、生きて使える技能として定着できる授業を毎回創意工夫を凝らし提供しています。
また、常にモニタリングを行い、全員による毎授業のリフレクションと対話的双方向的授業の実現をめざしています。

〇FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加（所属学会・研究会）

・日本国語教育学会
・全国大学国語教育学会
・全国漢文教育学会
・日本中国学会
・中唐文学会
・日本杜甫学会
・東方学会
・日本漢字学会
・中国文化学会
・東山之會
・杜甫散文研究会
・日本ＬＤ学会
・発達性ディスレクシア研究会
・日本ＥＳＤ学会
・子どものレジリエンス研究会

〇自らの専門分野の成長

・杜甫散文研究会会員として「唐故范陽太君盧氏墓誌」の注釈を担当（科研費の共同研究協力者として）→研究終了後出版予定
・日本杜甫学会会員として、勉誠出版から刊行予定の『アジア遊学』の「杜甫と安史の乱特集」において、「夔州における抒情の深化ー「秋興八首」「詠懐古跡五首」の詩律と抒情」を執筆、出版社にて編集中。

４．教育の成果

〇その方法によりどのようなことが実現できたか
・課外活動におけるゼミナール活動の実現（各自の研究テーマを深め、就職活動にも資する多様なゼミ活動、例えば、各種学術研究会等への参加やICTを活用したオンライン教育懇話会での発表等を実施し、参加した学生諸君は将来への展望を得ることができました。
・達成できなかったことおよび今後の課題については、後掲の授業アンケートの結果にも表れているように、教員免許状を取得できる水準に到達するためには、学生自身の学修意欲が大きく左右します。また、理論や知識だけでなく、それらを教育現場で実際に活用していくには、身体にしみ込ませる必要があります。その前提としての授業における稽古や鍛錬が、学生諸君にとって大きな壁となっていることは否めない事実です。いかに興味関心を喚起する授業であっても、そこから生起した「問い」を探究することに自身で喜びを見出すことが肝要です。しかし、その道程は容易なものではなく、時間と忍耐が必要です。いかにこの一筋縄ではいかない探究の過程における学生諸君のモチベーションを維持していくための４つの観点（①共感【気づき、うなづき、思いやり】②寛容【受け入れ、ゆるし、愛すること】③関係性【関わる力、関係を創る力】④レジリエンス【落ち込みから立ち直る心の弾力性】を踏まえた関わりができるかが、本学における私の大きな課題であり、日々試行錯誤の連続でもあります。

５．今後の目標

〇短期的目標
１.杜甫を中心とした唐代詩壇研究さまざまな困難に直面する度に、変容を遂げた杜甫の詩論、詩律を同時代人と比較することによって、同時代人には理解できなかった杜甫の革新性、先駆性についての研究。
２．中国古典（文学・思想）の叡智を学校教育へ普及させるための研究（レジリエンスの向上）。中国古典（文学・思想）が包含する「人はいかに生きるべきか」という叡智を中学校・高等学校の教育課程（国語科・社会科・道徳・探究等）に位置づけるための研究。
３.学びのニーズに対応する学習環境の構築と提供に関する研究（読み書き困難の支援）
平成28年「中教審答申」や平成29年告示「学習指導要領」で掲げられた児童生徒の教育的ニーズの多様化に応える配慮、支援を学校現場で具現化するためSociety5.0やGIGAスクール構想を踏まえたLearning Difference〈学び方の違い〉を重視した実践研究。
〇長期的目標
「個性を尊重しながら各人の成長を促し、人類の未来と社会の発展に貢献する」という本学園建学の精神のもと、園児、児童、生徒、学生、教職員等すべての構成員が、互いの個性を大切にし、お互いの強みを発揮し、成長できる学園を目指す質の高い本質に迫る教育・研究活動を行い、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会実現のための国際目標であるSDGsの実現に貢献する。
ことばだけでなく、あらゆるコミュニケーション手段を働かせて、①共感（気づき、うなづき、思いやり）②寛容（受け入れ、ゆるし、愛すること）③関係性（関わる力、関係を創る力）④レジリエンス（落ち込みから立ち直る心の弾力性）の４観点を踏まえ、多様な考えや背景をもつ人と人とを繋いでいける学びの環境を構成し、人と繋がれる喜びを実感できる教育を推進し、さまざまな「学び」を探究し続ける教員を養成する。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
〇シラバス、授業評価案アンケートを参照。 〇各種学生支援の内容 ・オンライン教育懇話会（月1回zoomによる開催　参加者：学生・現職幼保小中高教員、大学教員他） ・オンライン授業研究会（学生の要望に応じて随時開催、授業構築法、生徒支援等） ・教員採用試験対策指導（学生の要望に応じて随時開催、板書指導、模擬授業、特別支援等） ・面接対策指導（学生の要望により随時開催、教員採用面接、公務員・企業採用面接） 〇主な著書・論文 ・書評　読字差異の可能性は無限 - 文字優先社会において「文字を読めない」とはどういうことか（書評：マシュー・ルベリー著『読めない人が「読む」世界 読むことの多様性』原書房）、週刊 読書人、2024年5月3日号　・正岡子規「杜甫秋興八首」（短歌）の原典探索(1)、ポトナム 101(1176) 28-31、2024年4月 ・読み書き障害の児童生徒の学習支援に資する教員用手引き書、公益財団法人日本教育公務員弘済会助成（2021年4月-2022年3月）、冨山 敦史 (Atsushi TOMIYAMA) - 資料公開 - researchmap ・「能」は面白い！ 羽衣 （DVD教材）、伝統音楽普及促進事業実行委員会：冨山敦史, 河村晴久, 大倉源次郎, 森田保美, 有松遼一, 藤田隆則, 奥忍, 永井正人, 村上美智子, 西村大輔, 今里昌宏, 仲道郁代, 河村奈穂子, 清水元美, 西野春雄 (冨山担当範囲:解説の構成･執筆、指導上の留意点、学習指導要領との照合、指導計画の作成)、エイキョウビデオ、2020年3月 ・高等学校教科書｢言語文化（必修）」の短歌創作について、 ポトナム 99(1156) 36-40、2022年8月 ・ブッククラブメソッドを活用した短歌の創作・鑑賞の試み、ポトナム 99(1152) 82-86、 2022年4月 ・橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な 教員養成に係る研究報告（授業支援） －授業支援を通した学生の授業観の変容に着目して－ 冨山敦史, 佐野智子, 芹沢拓実, 袴田奈知, 伊藤綾音、教育研究実践報告誌 5(2) 52-61、2022年3月 ・『学習指導要領』「指導上の配慮事項」を具現化するために－授業で個別最適化環境を作り出すICT活用ー、教育研究実践報告誌 4(2) 68-77 、2021年3月 ・「能」は面白い！中学生・大学生とともに「能」の魅力を考える、常葉大学教育学部紀要 (41) 325-348、2021年3月 ・学びに向かう学習環境の提供－最適な支援を提供するために－日本国語教育学会、月刊国語教育研究 53(557) 32-35、2018年9月 ・杜甫の「詩家自覚」異説 : 詩を残すということ、常葉大学教育学部紀要 (38) 55-68、2017年12月 ・どうすれば毛筆で上手く文字が書けるのか、常葉大学教育学部紀要 (38) 447-461、2017年12月 ・杜甫と孟雲卿 「三吏三別」における文学観の受容と対峙、奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要第1号 1(1) 35-43、2015年3月 ・「語り」で学ぶ古典学習～「能楽」「平家物語」の「語り」を通して～、奈良教育大学附属中学校 研究紀要 第43集 (43) 21-30、2014年10月 ・学校ぐるみで取り組む漢字・語彙指導ー教科書理解の礎となる漢字・語彙の指導、日本国語教育学会、 月刊国語教育研究 49(501) 16-21、2014年1月 ・対話を通して「読み」を広げ深める指導～多田孝志「対話とは何か」･池田晶子「言葉の力」を通して～、奈良教育大学附属中学校 研究紀要第42集 (42) 17-29、2013年10月 ・生徒の学ぶ意欲を高める学校ぐるみの取組－小・中連携の視点から、奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 Vol.22(22) 131-13、、2013年3月 ・夔州における杜甫「拗体七律」の試み、奈良教育大学国文 (35) 12-34、2012年3月 杜甫と郎官－詩人の自覚と足掻きー和漢語文研究 (9) 30-5、、2011年11月 詳細は、https://researchmap.jp/sallygarden/を参照。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	西江なお子

1．教育の責任

【担当科目】
家庭科指導法、衣食住の理解、人間教育実践力開発演習Ⅳ、教職実践演習、人間教育学ゼミナール基礎、人間教育学ゼミナール応用
【各種学生支援】
・各科目の特性に応じた授業を工夫しながら、教員に必要な知識・技能の確実な定着を図り、個に応じた指導の徹底を図っている。具体的には科目や学修内容に応じて適宜ディスカッションやグループワーク等を取り入れるとともに、ICT機器を積極的に活用し、学校現場で活用できる能力の育成を目指し支援している。
・「人間教育実践力開発演習Ⅳ」においては、担当教員やキャリアセンター教職担当教員と連携を図り、教員に必要な資質能力を身に付けさせるべく、実践力育成に向けての指導を徹底している。
・必要に応じ適宜保護者との連携を図り、主体的に学びに向かう学生の育成を目指し支援している。教職志望学生に対しは教員採用試験に関する情報提供をするとともに、教育時事や面接指導、授業作りなど個に応じた指導を徹底して行っている。

2．教育の理念・目的

「人を支える人になる」というスクールモットーのもと、豊かな人間性の学生を育てることを目指し教育に携わっている。幼稚園、小学校での教員経験を活かし、教職の魅力を伝えるとともに、学生一人一人が人間教育学部の学生としての自覚と誇りを持ち、教員に必要な資質・能力を身に付けられるよう、教育活動全体を通して学生指導にあたっている。

3．教育の方法

【学生指導】
学生の自己実現に向けて、個に応じた丁寧な指導を心がけている。教員養成課程の特色を生かし、教職志望学生の増加と、教職に就くという自覚の向上を図るため、各科目において学生が常に教員の視点で思考する場面設定を行ったり、学生が学びの主体となるような授業構成を工夫したりして指導している。また、理解度の差に対しては個別対応やICT機器等を適宜活用するなど個に応じた指導を行い、学生が自信をもって社会に出ていけるよう実態把握を徹底して行っている。
【授業の工夫】
・家庭科指導法：家庭科の内容と教育目的について理解するとともに、家庭生活を大切にする心情や生活に関する科学的な知識・技能、衣や住及び消費者問題、地球環境への配慮等、児童を取り巻く諸課題について考えたり、模擬授業に向けて全学生に個別指導を行ったりして実践力育成を目指している。教材研究、指導案作成等の課題を課し、全学生にフィードバックし、家庭科の指導力育成を図っている。
・衣食住の理解：家庭分野に関する幅広い知識・技能の育成を目指し、適宜実技やグループワークを取り入れながら授業を行っている。家族など身近な人間関係におけるコミュニケーション、食育をふまえた家事技術、衣や住などの環境に配慮した製作など、効果的な指導方法と授業効果についての教材開発やそれに伴う実践を行っている。
・人間教育実践力開発演習Ⅳ：教員に必要な資質・能力であるコミュニケーション力、課題解決力等の能力を向上をめざし、教育課題や時事問題等の情報収集を行い、グループディスカッションを行ったり、面接や模擬授業などを実施したりすることを通して、学校現場で活かせる力の育成を図っている。
【FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加】
学内FDに参加し、自身の授業方法やカリキュラム内容の改善・向上を図る努力を行っている。
【自らの専門分野の成長】
研究分野である家庭科教育、消費者教育において、所属学会である日本家庭科教育学会では支部役員、日本消費者教育学会は副支部長として研究を進めている。両学会において、学会員と教材開発に向けて研究を進めるとともに、研究の過程において得た知見を担当教科である衣食住の理解や家庭科指導法において学生に適宜情報を提供し、ディスカッションしたり、調査したり出来る環境を整えている。

4．教育の成果

学生による担当教科の授業アンケートにおいて、「この授業は、総合的にみて満足できるものだったか」、「教員は意欲的に取り組み熱心な指導をしていたか」という問いに9割の学生が「はい」と回答しており、学生の学びを保証することができる概ね満足度の高い授業を展開することができたと捉えている。その要因として学修への不安を抱く学生への個別対応の徹底をはじめ、グループワーク、調査・発表、指導案作成など教科の特性に応じて工夫して行ったことが考えられる。今後も、学生の実態を把握し、必要な支援を適宜行う努力をしていく。

5．今後の目標

【短期目標】
実践力育成の実現に向けた学修内容の更なる工夫を図る。具体的には、コロナが落ち着いたことにより食を伴う実習の再開や、学生が意欲的、継続的に取り組むことができる課題の提示など。

【長期目標】
「人間教育学部」として、一人でも多くの学生が教員をめざし高い学習意欲のもと、教員採用試験突破に向けて勉強に取り組む姿勢を育成していくことを目標に今後も取り組んでいきたい。この目標実現に向けて、入学時から教職の魅力を各科目において伝えると共に、学生の教員としての資質・能力の育成にむけ、実践力を身に着けられる授業及び学生支援を継続して行っていく。

- **必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）**

・シラバス、授業評価アンケート（本学HP参照）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	林　悠子

1．教育の責任

人間教育学部乳幼児教育専修教員として、「子どもと表現（体育）」「子どもと表現の指導法」「教職実践演習（幼・小）」「教育実習事前事後指導」「教育実習（幼）Ⅰ・Ⅱ」「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」を担当し、幼稚園教諭・保育士資格の取得を目指す学生らを指導している。また、小学校専修科目として「運動・健康の理解」、音楽専修科目として「音楽表現ⅠB（リズム&ダンス）」「音楽表現ⅡB（リズム&ダンス）」「身体表現演習Ⅰ」「身体表現演習Ⅱ」「身体表現特殊演習Ⅰ」「身体表現特殊演習Ⅱ」も担当している。自身の専門領域であるスポーツ科学・体育学をベースにして、乳幼児教育における「表現」「健康」に関わる領域、次の発達段階である小学校における「体育」のみならず、広く身体と心の発達や、身体表現と音楽表現に関わった分野を担当している。また、学生の実践力や乳幼児教育についての専門性を高めるべく、教育現場と連携をしながら教育実習事前事後指導ならびに教育実習を担当している。「人間教育学ゼミナール」を通じて、学生のアカデミックスキルを育てると同時に社会人としてのスキルを養うべく学生の進路支援を行っている。

2．教育の理念・目的

本学の教育理念に「現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する 」とあるが、特に学識と実務能力を備えた学生の育成を目指している。また、自身の専門であるスポーツ科学・体育学や心理学の立場からは、心身共に健全で豊かな人間性を持った学生を育てたいと考える。

3．教育の方法

学識と実務能力を備えるためにはまず基礎的知識の定着が前提であると考える。そのため、まずは教科書や参考資料をよく読み込み、特に重要なことを読み取り内容について要約する力を身につけられるようレジュメの工夫を行っている。また、「子どもと表現（体育）」「運動・健康の理解」等の科目では理論とともに体育や身体表現の実技を行うが、幼児や小学生の体育実技としては技能的に自身が既にできる内容が多いため、なぜ行うのか、どのように行うのかと考えるよりも体を動かすことが先行しがちになってしまう。さらに、今の学生の特徴として動画など視覚や見映えに頼る部分が多く、深くじっくりと探索したり考えることがないがしろにされがちであると思われる。その運動がどのような意味を持つのか、どのようなねらいがあるのか、何に気をつけるべきかなど、常に言語化させることに気をつけている。また、言語化されたレポートについて分析を行い学会発表をすることにより、自分自身の教授法や教授内容についてのフィードバックを得ている。

4．教育の成果

令和5年度前期「子どもと表現（体育）」における学生評価では、「学生の様子を確認しながら授業を進めていた」「実技も教室の授業も楽しく、グループ学習もやりやすかった」と概ね好評であった。ただし「運動・健康の理解」においては「スライドの文字数が多い」「記述が多い」との意見があり、学習指導要領解説や体育科教育学についての講義の部分では難解で繰り返しとなる内容も多いため、簡略しつつわかりやすい講義内容に気をつけたい。

5．今後の目標

これまでも授業見学や教育実習の受け入れなど登美ヶ丘幼稚園・小学校・中学校・高等学校との交流はあるが、キャンパスのスケールメリットを活かし、継続的な授業見学や見守り、支援等の連携がさらに進むとよいと考える。幼稚園を中心に小学校から高等学校、大学まで揃うため、いずれは発育発達の縦断的研究を行いたいと考える。

• 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

○「子どもと表現（体育）」「運動・健康の理解」シラバス参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	原口　忠之

1．教育の責任

担当授業科目

幾何学基礎，幾何学A，幾何学B，応用数学I（位相幾何），教職表現力演習，開発演習IV，人間教育学ゼミナールI，人間教育学ゼミナールII

学生支援

・課題・教採等に対応する動画の作成

・質問対応

・教採対策

2．教育の理念・目的

自らの教育理念と目的

・私の教育理念は、幅広い意味での成長である。数学を媒体として未来を担う子ども達の成長を促すことが目的である。

価値観・信念

・近年は偏差値を上げることが教育の目的として注目を浴びることが多いが、偏差値に関係なく自分の好きなことを引き延ばせるような教育ができればと考えている。

3．教育の方法

学生とは、対話を大事にし、授業中に学生の状況を確認しながら進行を意識している。とくに担当科目の幾何学では、幅広い幾何学的な性質を勉強することで、教員になっときの引き出しの和を多くしている。また、私自身も現在の研究・教育についてのニーズを理解するためＦＤ／ＳＤ研修にも参加している。専門分野の位相幾何学では、連続写像のように柔軟性をもつ写像に対応しやすいホモトピー論を、柔軟性に欠ける微分構造をもつ対象に対して、導入することを試みている。

4．教育の成果

私のゼミ生から、教採において、毎年、数学専修の1期生から1名以上が突破している。

5．今後の目標

今後は、やり残している研究内容をまとめながら、新たな分野にも興味を持ち、微分空間の可能性を引き出したい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

採用試験の合格者情報については、問い合わせがあれば答えていきたい。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	松岡克典

1．教育の責任

本学において、主に小学校教諭免許取得にかかわる科目を担当している。特に、公立小学校・国立小学校・私立小学校の教育現場の実務経験を生かし、授業のねらい，指導案作成の仕方や指導の在り方，子どもの様子、保護者の対応など，実践教育の基礎について具体的に指導している。

本年度は，人間教育学部の科目として，「算数科指導法」「数の理解」「人間教育ゼミナールⅠ」「人間教育ゼミナールⅡ」「教育方法・技術論」を単独で開講しており，「人間教育実践力開発演習Ⅲ」「教職実践演習」「教育実習事前事後指導」「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」はオムニバスまたは共同で開講している。

専門分野が算数教育であるため，実践に役立つような教材研究の仕方や教師の働きかけについて具体的に伝え，基本的な概念から捉え直すようにし，小学校教員となった場合に基本的な視点から捉える考え方を身に付けさせようとしている。

2024年度の担当科目

単独：算数科指導法，数の理解，人間教育ゼミナールⅠ，人間教育ゼミナールⅡ，教育方法・技術論

共同：人間教育実践力開発演習Ⅲ，教職実践演習，教育自習事前事後指導，教育実習Ⅰ，教育実習Ⅱ

2．教育の理念・目的

教育とは人間愛であるという立場で進める。それは，31年間小学校で実践教育を行ってきた経験から大切なことだと学生に伝えたいからである。教師は，担任になると決まった瞬間から，全く知らない子供たちであっても，全力をあげて尽くそうとする。この「人間愛に基づく教育・指導」を，実践でも生かすことができるよう，多くの具体的場面を取り上げ，より望ましい人間愛に基づく指導法について考察していくようにする。

私は、本学の教育活動において、以下の３点を重視している。

1) 小学校教育に関する専門的知識と実践力を身につけること

2) 子どもや家庭、保護者を取り巻く状況など、社会の出来事に関心をもつこと

3) 学びを通した自己の成長を意識すること

3．教育の方法

上述の教育理念を達成するため，例えば1年次後期の必修科目「数の理解」では，次のような授業を行っている。

この科目では，小学校算数科で扱う教育内容の背景や関連内容を中心に扱い，主体的・対話的で深い学びに繋がる授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように，具体的な活動を取り入れながら考察していく。

授業の際は，実際に小学校で使用している教科書や学習指導要領解説の該当ページを示し，書かれている内容の理解や行間をよむということを意識させるようにしている。また，算数科の授業DVD視聴を通して，実際の授業の様子や子どもの考えを具体的に学ぶことができるようにしている。そして，アクティブアカデミーのwebフォルダに授業の内容を掲載し，いつでも授業の振り返りができるようにしている。さらに，毎時間「課題レポート」を提出させ，本時の復習と次時の予習に取り組ませるように工夫している。

現在の教育現場の実態を把握するために，公開授業や研究授業に積極的に参加し，様々な小学校と交流を深めている。

自らの専門分野の成長のために，学会での発表や，論文投稿を行い，研究の成果や方向性を確かめている。

4．教育の成果

2023年度前期「教育方法・技術論A」の授業評価アンケートにおいては、全体結果の平均を上回る結果であった。現場における授業の指導や普段の授業でも学生の反応を確認しながら，場に応じた指導ができたという手応えがあった。また，授業時間外の学習の必要性を伝えること，具体的な指示，授業態度に対する指導などが，2年前と比較して向上した。

対面授業が実施され，学生の個々の学びの様子を把握できるようになったことが大きい。今後も全体と個のさらなる指導方法を身に付けたい。そして，意欲や興味を持続させる工夫をしていきたい。

5．今後の目標

〇短期的な目標

・授業担当科目「算数科指導法」の充実

教育者としての表現力についての学生の理解を深め，学生の主体性をさらに引き出す授業を目指したい。

・授業担当科目「数の理解」の学生理解度の向上

算数を学ぶ学生の理解を深め，授業力の基礎となる算数教育を促進したい。
・学生指導の徹底
学修成果の向上につながる学生個々の指導を徹底したい。教員採用試験の合格率を上げる。
〇中・長期的な目標
・大学教員としての資質・能力の向上
・奈良学園小学校との連携推進
・算数科授業デザインの開発をテーマとした研究推進

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・「教育方法・技術論」の授業を，ICT教育の内容を加えることと，テーマに関するディスカッションが活発になるようにシラバスを改善した。
・毎回の授業を振り返り，学生の実態に即した授業内容および方法を検討しながら，緊張感を持って教育改善に取り組んでいる。そして，学生を認める教育にこころがけながら教師養成教員としての自覚および責任感を持って教育に携わっている。また，学生の意欲・態度を引き出す授業となるように努力している。そのためには，学生と授業担当者との信頼関係が重要であると捉え，授業はもちろん授業外においても学生とのラポールを築くように取り組んでいる。
・いくつかの科目についてのシラバス本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。
・各種学生支援の内容Active Academyに登録されている指導記録を参照のこと。
・研修会や学会へは毎年複数回研修会や学会に参加を行っている。最近は従前の対面開催に戻りつつあるため，対面の場合直接会場に行き参加している。
・いくつかの科目についての授業アンケート等本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	森瀬智子

1．教育の責任

【担当科目】①合唱Ⅰ　②合唱Ⅱ　③西洋の音楽史と理解　④諸民族の音楽　⑤声楽実技Ⅰ　⑥声楽実技Ⅱ　⑦声楽演奏法演習Ⅲ
⑧声楽演奏法演習Ⅳ　⇒　音楽専修科目、中等免許科目
⑨音楽の理解　⑩音楽科指導法　⇒　小学校免許科目
⑪人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）　⑫人間教育学ゼミナール（応用）⇒卒業必修科目　⑬人間教育実践力開発演習Ⅳ

・学生支援⇒　2年生以上の音楽専修希望者への授業外個別レッスンと講義、希望者（小学校専修、乳幼児専修等）への授業外ピアノレッスン、春休み、夏休みに音楽・小学校・乳幼児専修学生（希望者）教採2次試験に向けての弾き歌いとピアノ実技のレッスンの実施。

2．教育の理念・目的

自分で考えて行動できる自律した音楽を通して社会に貢献できる人材の育成、幼児・児童・生徒があこがれるロールモデルになる教員の養成を理念としている。元来、音楽とは楽しく、また人の心を癒してくれるものでもある。教員が音楽に親しみ音楽の素晴らしさを身をもって伝えることで、子どもは音楽を楽しいものだと感じ、自ら様々な音を試し、音楽に触れようとする。それが自分の表現に結びつき、認められることによって自己肯定感も高まる。このような経験が生涯音楽に親しむ基盤となり、また音楽によってそれぞれの生活を豊かにすることにも繋がっていく。教員となる、又は音楽に関する仕事に携わる学生には、楽しさを伝えられるだけの音楽の技能とそれを伝える手法を獲得させることを常に意識している。

3．教育の方法

・学生の自律のために、まず学生に「自分が今何をする時か考えて行動する」ということを、実務経験から中学生にこれまで問い続けたことで生徒が変容していったことを伝える。また、学生にもこれを問い続け自律を促す。
・ロールモデルとなる教員養成のために、学びたいと学生が望めば、惜しみなく自分が得てきた音楽教育の技を伝え、音楽技能を高めたいと望めば、レッスンも幼・小・中専修問わずに行うことを伝えている。また、あこがれがあこがれを生むため、いかに子どもと音楽を一緒にすることが楽しいか、ということも伝えるようにしている。
・学生同士であこがれがあこがれを生むように、学び合い、刺激し合う関係性を育めるよう、協同学習を柱とした授業を紹介、展開している。
・方法としては、研究を進めている深い学びに通じる一人ひとりが役割分担をもった協同学習の手法を主として授業を行っている。
・協同学習に長年取り組んでいる神戸大学附属中等教育学校の音楽の研究授業の指導助言者であるため、ゼミの学生も研究授業に参会し、生徒の様子を見ることで学びを深めた。
・専門分野においては、小学校・中学校・高等学校の音楽研究部会で合唱授業の講習や講演を行ったり、様々な中学校・高等学校の音楽の合唱指導を行い多くの生徒に接したりする中で、再度３０年間蓄積してきたメソードを見直し、歌唱発声における新しいアプローチ方法を実践し、効果を得ることができた。また、今年3月には専門分野の声楽と合唱のプログラムでチャリティーコンサート『森瀬智子と仲間たち』を主催し、300名定員のホールが1か月前には満席になるほど盛況で、赤十字に寄付を行った。
・FD/SDの学内の研修においては時間が許す限り参加している。

4．教育の成果

小学校免許科目『音楽科指導法』では、学生の入学時での音楽の理解の差を感じていたため、昨年度までの内容に毎回数分でも鍵盤を弾ける時間を取り入れた。その結果、初回の授業では音符について苦手意識をもっていた学生が、最後には科目の達成目標の一つである簡易伴奏で弾き歌いをすることができる姿が見られた。このことによって今まで音楽に触れていなかった学生も、本人にその気があり、丁寧に取り組むと、半年でもそこまで力をつけることができるということが明らかになった。また、授業での学生の音楽の理解度から、全てのグループができるだけ同じ力になるようにグループ分けをし、協同学習が効果的に進める工夫を行った。学生のリフレクションからは、4人で協同して課題を進めていくため、楽しんで課題解決ができ理解を深めることができた等の記述が見られた。（授業評価総合4.52点）学部内全科目平均は4.08

講義形式である『諸民族の音楽』では、映像を視聴して考える等は自分ごととして集中して学習できたようである。しかし、協同学習の手法を使った授業の展開方法を伝えることはできたが、協同学習は個人が役割分担をもち、話し合い、課題を解決する方法であるため、授業の進度と計画の関係から、協同で学習を多くとり進めることはできなかった。（授業評価総合4.53点）

授業アンケートでは、今回初めて実技を伴う科目のアンケートも実施されたたが、総合評価を科目別に見ると、合唱では最高点の5点、声楽実技Ⅰでは4.65点、声楽実技Ⅱは4.78点、声楽演奏法演習Ⅱは4.85点という結果となった。声楽についてはレベルが上がるに従って評価が上昇している。

5．今後の目標

音楽科の協同学習の手法を学生にもっと学びたい、と意欲を持たせる為に、学生が興味をもった小学校音楽で使う常時活動の言葉と同じくらいの頻度で学生に協同学習について話をし、紹介していく必要がある。効果が見えてくると、学生も自律して授業時間外にも学修に取り組むことが増える。・短期的には学生のレベルに合わせたポップスを用いた協同学習の単元を用いて興味をひく授業を実際学生に体験させ、音楽は身近で楽しいものだと感じさせることで学習の自律を目指す。・長期的には特に音楽専修の学生においては、2年次の『諸民族の音楽』や『西洋の音楽史と理論』

において、協同学習の手法を使った授業の指導案を作成し現場で実践を行う。またゼミでは協同学習の手法で学習を進めた後、その手法を用いた中学校の授業見学の場を設定する。その第一段階として、私が指導助言を務める協同学習の手法を使った音楽科授業の研究会へゼミの学生とともに訪れた。次はゼミの学生が作成した協同学習の手法を用いた鑑賞領域の指導案を中学校や高等学校の音楽の授業で実践し、検討⇒改善を行うことを繰り返し、新規性のある鑑賞授業を学生と共に創造する。

・新規に音楽専修学生発案の演奏会を学生のマネジメントで行った。今後は学生主導で、集客力のある演奏会に成長していくことを目指したい。

- **必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）**

2023年度　授業評価アンケート(集計表)

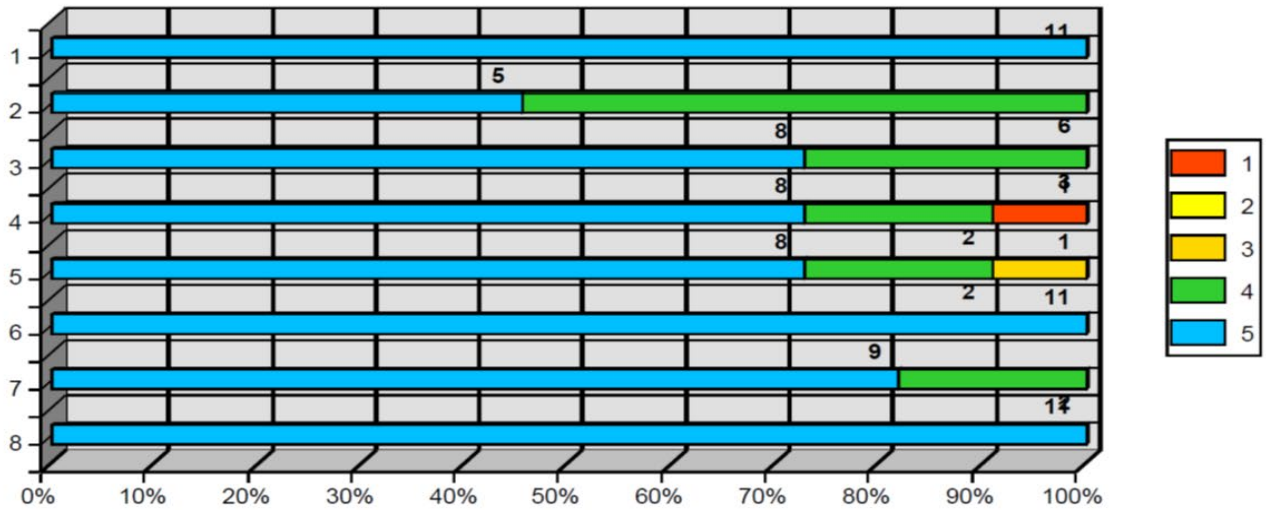
開講年度　2023年度　火曜日1時限　森瀬　智子

合唱Ⅰ

アンケート総数　11 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	11	0	0	0	0	5
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	5	6	0	0	0	4.45
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	8	3	0	0	0	4.73
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	8	2	0	0	1	4.45
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	8	2	1	0	0	4.64
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	11	0	0	0	0	5
7．提示された資料（文字，図表など）はわかりやすいですか。	集計	9	2	0	0	0	4.82
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	11	0	0	0	0	5



2023年度　　授業評価アンケート(集計表)

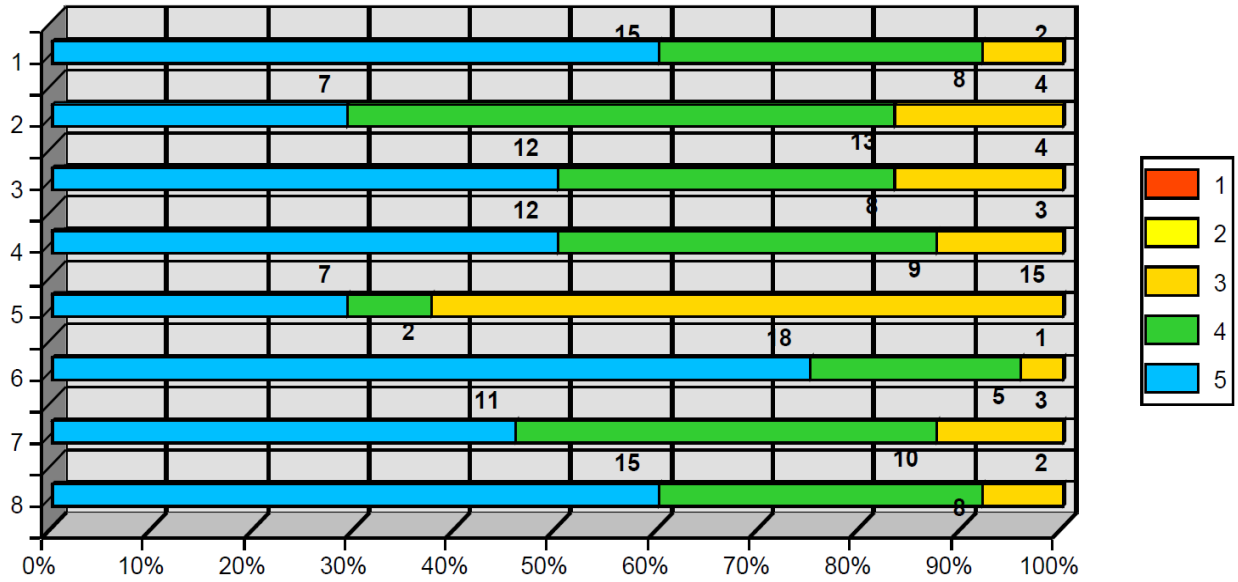
開講年度　　2023年度　　水曜日1時限　　森瀬　智子

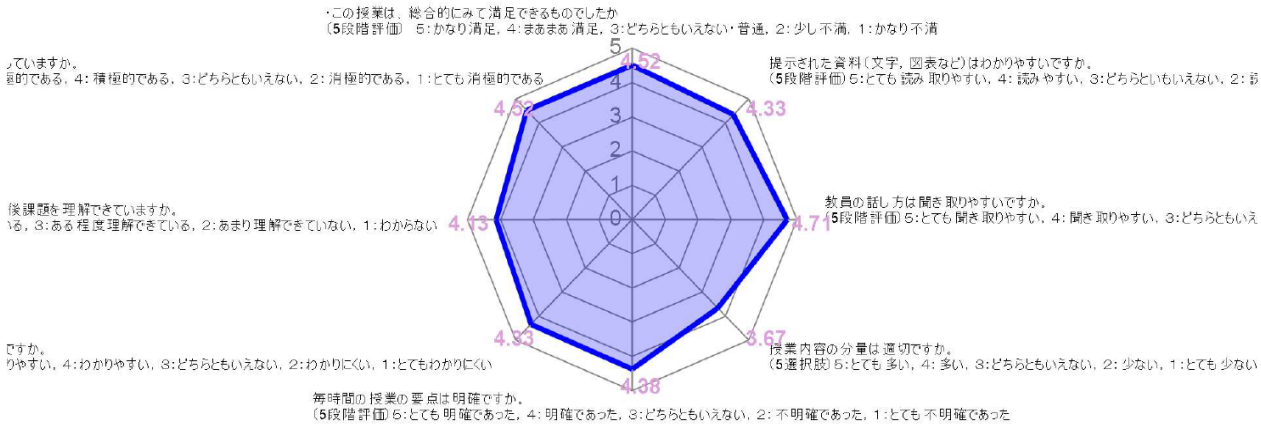
音楽科指導法

アンケート総数　　25 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1

	評価	5	4	3	2	1	平均
1．この授業に積極的に参加していますか。	集計	15	8	2	0	0	4.52
2．この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていますか。	集計	7	13	4	0	0	4.13
3．教員の説明はわかりやすいですか。	集計	12	8	4	0	0	4.33
4．毎時間の授業の要点は明確ですか。	集計	12	9	3	0	0	4.38
5．授業内容の分量は適切ですか。	集計	7	2	15	0	0	3.67
6．教員の話し方は聞き取りやすいですか。	集計	18	5	1	0	0	4.71
7．提示された資料（文字，図表など）はわかりやすいですか。	集計	11	10	3	0	0	4.33
8．・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	集計	15	8	2	0	0	4.52





ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	山田　明広

1．教育の責任

〇担当授業科目（2024年度）：

・漢文学入門　・漢文学Ⅰ　・漢文学Ⅱ　・語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）　・漢文学特論
・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）　・人間教育学ゼミナールⅡ（応用）　・基礎ゼミナールⅠ
・教育実習Ⅰ（中・高）　・教育実習Ⅱ（中）　・人間教育実践力開発演習Ⅰ
・日本語表現Ⅱ

〇各種学生支援：

・３、４年次のゼミ生を中心に就職対策（教員採用試験の一般教養・専門科目のうちの古典の対策、公務員試験対策、一般企業のSPI・玉手箱の対策、各種就職試験の作文・小論文の添削等）を実施している。
・社会・国際連携センターの運営委員として、本学の提携校である屏東科技大学および蘇州科技大学との交流会の企画、実施および参加学生の指導を担当している。
・学生から相談を受けた場合、適宜、面談等を実施している。
・茶道部顧問

2．教育の理念・目的

〇教育の理念・信念：

何事にも基礎が重要。基礎の集積が理解へとつながり、そして自発的学習や発展的学習へとつながり、最後には研究へとつながっていく。

〇教育の目的：

専門知識や読解力をでるだけ身に付けさせることを通して、学ぶことによって新たな知識を得たり何かをできるようになったりすることの楽しさや喜びを伝え、それにより自ら学び・考え・研究する態度や能力を涵養する。

3．教育の方法

〇授業の方法・内容：

A，漢文学関連科目〔漢文学入門 、漢文学Ⅰ、漢文学Ⅱ、語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）、漢文学特論〕について

①まず、漢文の基礎である漢文法・句形を講義形式で丁寧に解説し、演習問題に取り組ませる。解説の際には、ただただ漢文の句形のみを扱うだけでなく、古典文法や現代中国語文法、漢字の特殊な読みおよび意味などにも言及し、できる限り覚えやすくなるように工夫する。また、漢文訓読独特の言い回しを身に着けさせるため、漢文の短文を暗唱させる。毎時間、課題として演習問題を課すとともに、さらに各単元が終わるごとに小テストを実施する。このようにして、漢文の基礎である漢文法・句形を習得させる。
②次に、故事成語のもととなった文章から、戦国諸子百家の文章、漢詩、歴史、散文、小説などに至るまでの各ジャンルの漢文による文章を順に選んで読んでいく。同時に、関連する思想や文学、歴史的事象についても講義し、知識を身に着けさせる。学生には課題として事前にノートに書き下し文と現代語訳を書かせるとともに、分からない語句の意味を調べさせておく。このようにして、漢文の読解力を養うとともに、漢文読解に必要な知識を身に着けさせる。
③漢文の読解力がある程度身に着くと、漢文の構造について講義した上で、返り点のみの文章や白文の読解に取り組む。これら1～3を通して、漢文を独力で読解できる能力を養い、ひいては漢文読解を伴う研究を行う能力を身につけさせる。

B，ゼミナール〔人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）〕について

「国際理解に向けての日中比較文化研究」というテーマの下、
①「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（３年次生対象）においては、基本的な知識を得るべく、中華圏の文化および中華圏の文化と日本の文化との関連についての講義を行い、学んだことをまとめ、討論させている。また、適宜、フィールドワークを取り入れ、学んだことが机上だけのものとならないよう、できる限り実際に体験させている。
②「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（４年次生対象）においては、学生個人が個別に設定したテーマについて調べさせ発表させている。また、特に希望する者には、卒業論文を書かせ、その指導も行っている。さらに、就職試験や面接に関する指導も行っている。

〇学生との接し方：

・学生が授業により積極的に取り組むことができ、さらに気軽に質問に来られるよう、授業においては、厳しく接するべき時には厳しく接するものの、基本的には穏やかな態度で学生に接し、時には雑談などを取り入れるなどして、教員と学生が相互にコミュニケーションを取りやすい雰囲気を作るよう心掛けている。
・学生がもし問題を抱えた場合には、一緒に親身になって考えてあげるよう心掛けている。

４．教育の成果

〇達成できたこと、できなかったこと：

・これまでに数名の学生が、中学校ないし高校での教育実習の研究授業において漢文を主とする授業を行うなど漢文の授業を行うことのできる学生は育成することができた。しかし、自ら進んで漢文の作品を読んだり漢文の白文を独力で読解しようとしたりするような漢文に興味・関心を持ち進んで学ぼうとする学生はいまだ育成できていない。

５．今後の目標

〇短期的目標：

・漢文に関心を持ち、中学校ないし高校での教育実習においてある程度自信を持って漢文の授業を行える学生を輩出する。

・海外のことに興味を持ち、海外留学や海外との交流に関する活動に進んで参加する学生を輩出する。

〇長期的目標：

・できるだけ多くの学生に漢文の白文を独力で読解できるなど漢文に関する発展的な能力を身に着けさせ、ゆくゆくは高等学校国語科教員採用試験合格者、ひいては漢文を用いた研究を行う研究者となるべく関連の大学院へと進学する者を輩出させる。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・学生評価アンケート

・シラバス

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部　人間教育学科	氏名	石原　由貴子

1．教育の責任

〈担当授業科目〉

・幼児理解　・保育内容総論　・子どもと表現（図工）　・子どもと表現（音楽）　・子どもと表現の指導法

・教育実習Ⅰ・Ⅱ　・教育実習事前事後指導　・教職実践演習　・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）

〈各種学生支援〉

・2023年度は、幼稚園専修２年次生の担任として、学修指導や生活指導など必要に応じて個別に対応している。また、教員採用試験に向けての面接指導や実技指導を行っている。

2．教育の理念・目的

『教育は愛』という理念の下、下記の３点について重視していきたい。

○　教師・保育士としての社会性や対人関係能力の育成

○　これからの時代の教育を担う実務・実践力の養成

○　豊かな想像力・創造力・表現力の育成

3．教育の方法

〈学生との接し方〉

・学生との対話を重視し、一人一人に応じた具体的な支援を心がける。

〈授業の工夫〉

・具体的な実践例や写真、動画等を提示しながら、保育現場の様子や子どもの遊びの様子、発達の姿、学びの姿などがイメージできるようにしている。

・授業中、その都度課題に取り組ませ、理解の促進を図るようにしている。

〈FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加〉

・学内におけるSD/FD研修会に参加し、学びを深めている。

・幼稚園や保育園の園内研究会の講師として参加し、保育現場の様子を把握している。

〈自らの専門分野の成長〉

・日本保育学会、日本学校教育相談学会、子どもと保育実践研究会、絵本学会等に参加し、最新の知見を得るようにしている。

・今年度、学校カウンセラーの資格認定を受けた。

4．教育の成果

〈達成できたこと、できなかったこと〉

・「実際の現場での子どもの様子や、学びの姿を聞かせてもらえるからよく分かる」「授業が楽しい」等の意見を聞くことができた。今後も意欲的にまた、主体的に学修に取り組めるようにしていきたい。

・予習や復習に割く時間が少ないように思われるので、自ら問題意識をもち、積極的に学修に取り組める授業内容を構築していきたい。

〈授業アンケートの結果〉

・各項目について、概ね学内の平均値を上回っている。

5．今後の目標

〈短期的目標〉

・学生の興味を引き出し、自ら意欲的に積極的に学修に取り組めるようにする。

〈長期的目標〉

・柔軟でしなやかな心をもち、どんなことにも前向きに貪欲に取り組める教員、保育士となれるような取り組みを考えていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・シラバス、授業評価アンケート（本学HP参照）

・各学会や研修会に参加している。

・子どもと保育実践研究会では、２ヶ月に１回程度、保育現場の先生方や幼児教育に関わる方々との研修を深めている。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	太田雄久

1．教育の責任

＜担当科目＞

理科指導法、自然の理解、人間教育実践力開発演習Ⅱ、教育実習事前事後指導（小）、教育実習Ⅰ（小）、教育実習Ⅱ（小）、基礎ゼミナールⅡ

2．教育の理念・目的

卒業後１年目から即戦力として現場で指導ができる教員になるための資質・能力の育成と人間性の向上

3．教育の方法

・課題の提出期限の遵守、教務システムの使用方法、メール等での連絡の確認漏れがないようにすることなど、大学生活を送るにあたって必要な事項を徹底して指導する。

・理科指導法、自然の理解ではテキストとして使用している『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編』を根拠にしながら小学校理科の授業論や内容論について指導する。

4．教育の成果

・先述したテキストの内容を根拠にしながら課題やレポートに取り組んだり、期限を守ってそれらを提出したりする学生が増えてきている。

5．今後の目標

・小学校理科を核としながら教科横断的な視点で小学校での授業づくりを実践できる学生の育成

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	オチャンテ　カルロス

1. 教育の責任

本学担当科目
①外国語の指導（英語、スペイン語）
　英語関連科目では4技能を活かした外国語指導を行っている。スペイン語の授業ではロマンス語の世界（言語と文化）を紹介し、日本語との国語比較を常に行っている。
・英会話I　（25人程度）
・英会話II　（25人程度）
・スペイン語会話　（20人程度）
・スペイン語基礎　（30人程度）
②小学校で外国語（英語）を指導行うための授業
・小学校低学年では話す・聞くの指導、高学年では、読む・書くの外国語指導を行っている。
・外国語の理解　（70人程度）
・外国語科の指導法・小学校外国語活動の指導法（70人程度）
③現代教育課題における異文化教育
　多様化する日本の公立学校において、異文化教育、多文化教育の理解を深め、外国に繋がる子どもの背景と対応を学ぶ。
・現代教育課題D（学校における異文化理解）（25人程度）
④人間教育学ゼミナールII（2年生、20人）主担
　アカデミックスキル、教育学の基礎知識を身につけることを目指している。
⑤人間教育実践力開発演習I（2年生、20人）
　学校生活や教育分野におけるコミュニケーションスキル、ソーシャルスキルを身につくことを指導している。
　学校ボランティアにおける事前指導、学校への連絡、ボランティア活動の報告などを担当
⑤研究及びキャリア（進路）指導
・特別聴講生の論文指導（通年）、研究発表会の指導（中国留学生１名）
⑥英会話におけるSA（スチューデント・アシスタント）の活動
・教員を目指す学生をSAとして設け、英語指導力を身につけさせる指導を行っています。
　SA活動を通して英語指導に自信が身につけ、後輩へのロールモデルとしての役割を果たしている。
⑦採用試験、英語対策JCT指導
・4回生対象に教員採用試験の英語対策講座をエクステンションの形式で行っている。
・4回生対象に採用試験で求められるICT力の指導を行っている。
・毎週火曜のランチタイムに参加自由型の英会話教室を行なっている。
・海外語学研修の事前英語学習の学生指導
・カンボジア研修の事前英語学習の学生指導

2. 教育の理念・目的

人間教育学部として「人間」または「良い教育者」目指すため、新しい時代において視野の広い学生の育成を授業で目指しています。
今後グローバル社会の中で多言語や他民族においての国際理解、多文化共生への理解（価値観）を深めることを常に意識しながら生活できる
生の育成を目指し、近代社会におけるICT教育の円滑な適応能力の育成を目指している。

3. 教育の方法

①指導者が外国籍のため、これまでの経験を活かして、国際理解、多文化、多言語においての多面的な視点で指導を行っている。
　外国語として英語指導の関連科目では英語、スペイン語や日本語との比較を常にし、学生の外国語における視野を広げることに
　力を入れています。
　具体的にそれぞれの言語の特徴（文法や文化など）を用いて外国語の共通点や違いを理解させることによって言語理解だけでなく、
　母語である日本語に対しての考え方、理解を見つめ直すことになっている。これらをもって異質への理解を迎えることで異文化への
　理解の促進も得られている。

②全ての授業におけるICT教育の取り組み（情報リテラシー）
　これまでICT教育を活かして、学生の授業内外で学習などのマネジメントを行ってきました。
　授業は全てGoogle ClassroomまたはMicrosoft Teamsで授業資料、課題管理、学生の意見共有などを行っている。現在、世界でこのようなプラットフォームを活かすことが近代の風習であり、学生の情報リテラシーの促進が求められる社会としての価値だけでなく、学生のニーズ、学習

ペースにも大きく貢献していると言われている。授業ではノート作りやメモの取り方を強く推奨しながらもグループワークやクイズではスマートフ
ンを有効な使い方に力を入れた授業を行っている。
英語学習で人工知能を今年度から利用し始めているOpen AIまたはMicrosoftのBING（Copilot）を使って英語の添削や文章の作成の指導を授
業で取り組んでいる。学生はスピーキング用に自ら作成した英文の添削を人工知能で行うことで自分の英文の修正点を確認するのに役立って
ます。
③アクティブラーニングを活かした学習環境作り
授業ではグループ・ディスカッション、ディベートまたグループ・ワークを活かして、学生の能動的な学習を目指した授業作りを
行っている。これらの取り組みでは学生同士の仲間作り以外に、プレゼンテーション力や意見の出しやすさの環境作りを目指している。

④多様化する教育課題への取り組み
現代多様化している日本の公立学校の実態を学ぶ取り組みとして、大学生中心による教育支援を三重県伊賀市の子どもを対象に行なって
る。
本活動の学生は指導側となり、外国に繋がるこどもへの教育支援を通して、言語の課題等、子どもが抱える背景の理解を深めることを目標
ている。

⑤ゲストティーチャーの講義
教育現代課題「D」の授業で言語支援の専門講師を招き、本授業で講義を行った。専門性の持つ様々な先生の指導法を学ぶことで学生の教
視野を広げることを目指している。

4. 教育の成果

① 英語4技能における実践
履修学生が多い科目では実践できる時間が限られる。そのためリスニングやスピーキングにおいての実践課題としてオンラインでリスニング
課題（動画＋プリント）を設け、また、スピーキングとして自己録画の提出を求めています。学生はこれらの課題を提出させ（グーグル
クラスルーム）教師がチェックと評価をスムーズに行うことが可能。学生はペアーや一人で作成した動画では練習を重ねて行ったりすることで
実践的な英語学習が毎回行うことができた。

②言語の理解を深めることで外国語への好奇心を促すような授業の作り方（外国語指導法）を模擬授業で実践された。
模擬授業では音声指導を扱い、日本語と英語の音素の違いから英語指導ではフォニックスを取り扱う実践的な指導を行った。
英語教材における国際理解・異文化理解の要素を理解するために異文化教育の基本を導入し、グローバル社会における
多言語の実態を理解できた。英語力がない学生は英語関連の科目だけでなくスペイン語の科目でも付いていけない課題があるため今後は
学習プリントや復習課題をより充実したいと感じる。

③ICTによる資料の最適化、課題の提出率の向上
授業で取り扱った資料には動画や音声を取り扱った。外国語指導するためには音声や顔（口）の様子を確認することが不可欠なため、
Youtubeでオンデマンド授業を行っている。オンラインでの資料は学生の学習ペースに合わすことが可能にすることで様々なニーズに対応
が可能になりました。
課題においてオンラインで提出が可能にした（グーグル・クラスルーム）。授業で取り扱うノートやプリントをオンラインで提出させる
ことで管理をし易くなるだけでなく、学生が提出しやすい形式になったことでスマートフォンあればいつでも課題を提出ができ評価や
コメントなども加えることで学生のと授業の外でのコミュニケーションは可能になる。課題の管理は教師だけでなく学生自身も確認が
取れるので実際に課題の提出率が向上した。全ての学生のパソコンとインターネット環境は整っていない課題であるため、今回の授業で支
なかったが、パソコンを使いこなしている学生とそうでなはない学生の情報リテラシーは今後指導をもっと徹底的に行いたいと感じる。
④授業アンケートの結果
対象科目である「英会話・II」、「外国語の理解」や「外国語の指導法」で学生からの満足度が高いことを評価と成果として挙げられる。
特に英語のレベルの異なった学生への対応と課題がこのようなアンケート結果に繋がっている。

5. 今後の目標

外国語の実践できる場
・今後の授業では他大学とのコラボレーションで英語の実施的な場を設けたい。
・英語学習の場としてエクステンションまたはサークルで英語学習のできる場を設けたい。
ICT指導の推進
・今後、教育現場で求められるデジタルリテラシーの育成に繋がるように授業で様々な展開を工夫し、アクティブラーニングを混合した授業

・今後、教育現場で求められるアンタルリアプランーの育成に繋がるように授業で様々な展開を工夫し、アクティブラーニングを混合した授業作りを目指したい。

地域との連携

・地域の学校との連携を図ることで本学学生の教育活動（ボランティア活動も含む）の範囲を広げ、地域で大学の知名度を上げるとともに地域貢献できる仕組みを目指したい。

- **必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）**

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	田　中　　紀　子

1．教育の責任

〇担当授業科目：数学科教育法I，数学科教育法Ⅱ，数学科教育法Ⅲ，数学科教育法Ⅳ，人間教育実践力開発演習Ⅲ，教育実習事前事後指導，教育実習I（中・高），教育実習Ⅱ（中），人間教育学ゼミナールI（基礎），人間教育学ゼミナールⅡ（応用），教職実践演習（中・高），卒業研究
〇各種学生支援：数学道場（高等学校数学Ⅲの内容や，教育実習・教員採用試験に必要な数学の学修支援），教採対策講座（教員採用試験に向けて，模擬授業や個人面接，ロールプレイの学修講座の講師・運営），数学科教育法や教職実践演習における外部講師依頼，セミナールI（基礎）セミナールⅡ（応用）登録者の教育実習や教員採用試験関係書類のチェック・大学推薦書の作成・指導助言，ゼミナール生ほか学生・保護者との面談・教育相談，数学専修の学生の数学科学習指導案の作成のための指導・助言，オープンキャンパス等における授業実施
〇担当委員：教職保育課程委員会

2．教育の理念・目的

〇理念：日本の子どもたちはPISA調査で世界的に見て高水準であるものの，学習の楽しみが感得できていない生徒が多い。また，数学を使った仕事につきたいという子どもたちは世界平均を下回っている。教育に高い関心を持ち、中学校・高等学校の数学科教師を目指す学生の資質・能力を養成するとともに，本学の教育理念である「人間教育力を身に付けさせる（人を支える人になる）」ことを念頭に講義やゼミ指導・学生支援に携わっている。
〇教育の目的：学生が人間教育学としてのアカデミックスキルを駆使し，専門分野の文献や論文によって見識を深めるとともに実習や研究会参加などに主体的に関わり、自らの専門性を深める能力を培い，教師としての実践力・即戦力を育成することである。

3．教育の方法

〇学生との接し方：講義では安全安心な環境（多様な発言が受け入れられる場）の提供を，またいつでも相談・質問に足を運びやすい研究室の雰囲気づくりをし，親和的に対話することを心がけている。
〇授業の工夫：数学科教育法Iから数学科教育法Ⅳでは，中学校学習指導要領解説・高等学校学習指導要領解説を基に主体的・対話的で深い学びを目指した数学科指導に関わる幅広い知識と，数学的な見方・考え方を主体的に身に付けることができるようグループワークを適所に設け，教材研究，学習指導案の作成，模擬授業等を行う。また人間教育学ゼミナールI（基礎），人間教育学ゼミナールⅡ（応用），卒業研究では、学生自身の興味・関心のあるテーマを設定し、深く掘り下げて探究し、協議等を踏まえてレポートや論文にまとめる。修得した知識及び演習等をふまえて、人間教育学における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める。特に「数学教育」「探究活動」等に関わる学生の興味・関心に基づいた課題設定と研究計画を立案し，調査・実験・探究を実施し，論文等の作成と研究成果の発表を実践させる。
〇FD/SD活動等にかかわる学内外研修会へ参加している。研究分野「数学教育」では，理数探究（SSH）等の探究活動を広める活動を，「数学教育史」では戦中にあった特別科学教育学級の調査を，「数学史」では江戸時代の和算研究や確率論史に関わる研究を、継続的に行っている。
【所属学会】日本数学会，日本数学教育学会，日本科学教育学会，数学教育学会，アメリカ数学会（AMS），NCTM

4．教育の成果

〇授業アンケートでは，数学科教育法Ⅱから数学科教育法Ⅳ，教職実践演習，教育実習事前事後指導等の学生アンケート結果は，学内平均を上回り良好である。数学科教育法Iでは，学生の「学ぶ側の見方」から「教える側の見方」への転換への誘導に課題がみられた。
〇数学専修の学生は，学内でも中高の数学科教員を目指す割合が高く，また令和6年度卒業生は中高の新任教師になった学生も多く，資質能力や意欲の醸成について一定程度成果があげられている。

5．今後の目標

〇現在学内外で受けている仕事を充分に果たす。
〇数学専修の学生の進路実現に有益な授業や教育実習指導，学生支援を行い，教員志望者・合格率増加に寄与する。
〇依頼のあった教育委員会事業，私立・公立中高探究型事業支援，奈良学園中・高等学校におけるSSH事業支援，日本学生科学賞応用数学部門中央審査等の社会貢献事業を行う。
〇研究活動では，「探究」や「特別科学教育学級」，「和算」に関わる論文執筆や，確率論史等に関わる研究活動を継続的に行う。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

〇シラバス：https://tango.naragakuen-u.jp/aa_web/syllabus/se0010.aspx?me=EU&opi=mt0010
〇学生支援の内容：１．教育の責任〇各種学生支援参照
〇研修会や学会への参加状況：本年は国際数学教育会議（ICME15）発表，国際数学教育史会議発表，日本数学教育学会（実践研究推進部）高大連絡協議会運営，春期大会ラウンドテーブル講演，総合研究大会大阪大会の高専大学部会発表・評価分野の指導助言者，日本数学会基礎論歴史分科会運営委員，日本数学史学会における講演，奈良セミナー参加・発表，数学教育学会「探究に関わるSG設立」，探究に関わる科学研究費事業参加，授業研究に関わる科学研究費事業協力者，京都数学史セミナー発表，津田塾大学数学史シンポジウム参加・発表，近畿和算ゼミナール参加・発表，飯高Zoomセミナー参加・発表等を予定している。
〇授業アンケート：https://drive.google.com/drive/folders/1OvIUWadm0S-fjgpax3ZMDuPGqfgTmuob

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	間井谷容代

1．教育の責任

（1）担当授業科目

・子どもと健康、子どもと健康の指導法、施設実習指導Ⅰ・Ⅱ、施設実習Ⅰ・Ⅱ、障害児保育

・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）

・授業では、保育現場での実践事例、教科書を活用しながら授業展開をする。（講義⇒実践事例⇒グループワーク⇒発表⇒振り返り）

・人間教育学ゼミナールでは、保育方法の研究、保育教材の作成・活用方法を探る、発達障害について事例を用いて対応について考える、感覚遊びの遊具の作成・活用方法を探る

（2）各種学生支援

・2023年はハラスメント委員として、学生相談対応を行った。

・教採対策として、造形・ピアノ・面接等の実技指導・専門分野の試験対策を行った。

2．教育の理念・目的

専門職として自分教育理念を以下にあげる。また、それを目的とする。

①応用のある保育実践力

保育現場では、資料通り、参考書通りの実践に必ずしもできる保障がない。そのため、その場に応じた臨機応変な対応を身に付ける必要がある。

②子ども一人ひとりに寄り添う力を培う

保育現場、施設の現場では子ども一人ひとりと向き合うことが必要不可欠である。子どもに合わせた丁寧な対応を身に付ける必要がある。

③他者と協働をしながら主体的に課題と向き合うことのできる人間力を高める。

問題が起こると対応に困りがちである。その問題に向き合い、検討する人間力が必要である。

3．教育の方法

・２の理念、目的であげた①②③を育成するために、授業等では工夫を行っている。

①実践力については、教科書上がる内容は、専門用語を活用した内容が多い。何気なくニュアンスで理解できるものの、そうでないものもある。そのため、保育をまだ理解できてない学生にそれをかみ砕き授業展開を行っている。また、時々、事例等を授業内容に応じて含め、より豊かな知識が身につけることができるように努めている。

②寄り添う力については、子ども一人ひとりの行動には必ずしも意味がある。それが性格からか生活からか検討をつけることができない。子どもの行動を探り、困り感に気づき、さりげなく対応する寄り添いの意味を深め、人間力を磨くことができるように進めている。

③現場の不安要素はそれぞれである。問題や困難に真摯に向き合うことが必要不可欠である。事例・DVDを活用しながら、主体的に問題に関わり、見極め、解決しようとする力が身につくように進めている。常に「なぜ」「どうして」という疑問をもち、その疑問解決を導く。

・FD/SD活動等にかかわる内外研修会には、積極的参加するよう努めている。

・自己向上として、専門分野の研修に参加し、最新情報の収集、指導法について学び、認定書証を取得している。

4．教育の成果

・授業アンケートの内容で、いつも授業での事前事後理解については、あまり自らしていない事が数字として表れ、方法について検討を探って取り組んでいた。その事があってか、事前事後の理解についての学びが4.1となった。学生それぞれの積極性を伺うことができた。全体の平均して、4．0以上であるので、自分自身の自信に繋がる。

しかしながら、スライドの進め方では、資料等を配布しているが、まだまだ、スピードがあるのか、速いような意見がある。スライドの内容を検討して進めるように努めていきたい。

5．今後の目標

・短期的目標として

授業ではPDCAサイクルできるように進める。少しずつ学生自身の身になるように復習を重視しながら進めていく。

・長期目標として

保育・養護は研修毎に情報が更新されている。それを授業に反映できるように努めていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・シラバス及び授業アンケートは本学HPに公開されている。

ティーティングポートフォリオ

	人間教育学部	**氏名**	前田　綾子

「子どもと言葉」「子どもと言葉の指導法」「保育所実習指導Ⅰ・Ⅱ」「保育表現力演習」「保育者論」
「保育実践演習」「教育実践演習」（2024年度）

2．教育の理念・目的

○ 保育現場での経験を生かした授業をすることで、大学での学びと保育現場での保育の段差を小さくし、実践力のある保育者を育成する。
○学生一人一人に向き合い、学生理解をした上で学生の思いに寄り添った支援を行い学生の意欲を引き出し、達成感を感じることで自己肯定感を上げる。
○学生が人との関わり方を今一度考え、コミュニケーション能力を高めるよう援助する。
○自ら学ぶ姿勢を忘れないように学生とともに成長する

3．教育の方法

○何もなくても知っている学生に会ったときには一言言葉をかけることで、学生に「あなたのことを見守っているよ」のメッセージを送る。
○どの教科でも授業の中でできるだけ、自分の体験や子どもたちの姿を具体的に伝えるようにしている。
○学生の意見を否定せず、共感したり認めたりする。学生からの主体的な発言を大切にする。
○早めに教室に入り、学生の様子を見守る。
○振り返りシートを書かせることで学生の理解度や意欲を確認する。

4．教育の成果

○学生との距離は縮まった。また、保育実習Ⅱでは、指導案について個別に相談を求める学生が増えた。
○授業中に寝ている学生がおり、授業に対する意欲を十分引き出せなかったのは反省点である。

5．今後の目標

○学生が自ら学びたいと意欲をもてるような授業の工夫をしたい。

○自分の研究を授業に活かせるよう自己研鑽に努めたい。
○学生にとって魅力のある幼稚園専修にしたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）